

労働者は虫けらやない！

「会社の都合で放り出すな！」と力合わす人々

「労働者は虫けらやない！」「会社の都合で放り出すな！」と区内の労働者と支援の人々が力を合わせていることが、読者からの一報で分かりました。太平洋セメント㈱（本社・東京）関連の生コン輸送会社である㈱高洋（福岡一・二・四）が十月末に「会社を閉鎖する」「営業を譲渡する」「全員を解雇する」と通知したことに対し、従業員で田中在住の松田一紀さん（五〇）と竹下良一さん（五二）が「そんなことされたら生活が壊れる」「会社をなくさず雇い続けてほしい」と求め、付き合っている地域の人々や労働者が「これは働く者みんなの問題や」「大企業である親会社の身勝手なやり方こそ許せない」「解雇が撤回されるまで一人を励まそう」と動いているのです。

「生活と権利」掲げ、大企業の社会責任を追及

◆「解雇通知」認めます

「この㈱高洋は、太平洋セメント㈱の子会社で

ある関西小野田レミコン㈱（高洋と同所）が百
万円を出資して設立した会社で、生コン輸送を担っ

てきました。これまでも実質的な人減らしは
徐々に行なわれていましたが、十月末の解雇通

知はその最終段階にあたる動きでした。

今年二月から提案があり、従業員との協議が続けられてきましたが、会社側は「退職しかない」との回答を繰り返していました。この中で従業員五人のうち二人は退職金などの条件を飲んでやむなく退職に応じましたが、二人は「解雇撤回」を求めました。そして関連する労働者や付き合ひのある地域の人々にもこの事態を知らせたところ、瞬く間に支援の輪が広がり、「高洋関連で働く仲間を守る会」(以下「守る会」)が結成されたのです。

◆「守る会」が支援行動

「守る会」は直ちに行動を始め、十一月五日には関西小野田ミミコンと高洋の二社に対して「企業閉鎖・営業譲渡・全員解雇を直ちに撤回せよ」「雇用継続・就労確保・生活安定への企業責任を果たせ」と求める「申し入れ書」を提出。十一月七日には大阪府労働委員会に「あつせう」を要請しました(その日、二人が帰宅すると、十一月六日付で「解雇予告通知」が内容証明で届いていました)。

さらに同十二日には支援者約百八十人の参加

を得て高洋の工場内で「決起集会」を開催し、

両社の親会社である太平洋セメントも含めた三社に対し、「解雇通知の撤回」「企業の存続」「雇用と就労の確保」を求める「要請決議」を採択



→「働く者みんなの生活と権利を守るため、親会社・太平洋セメントの横暴と闘い抜く」と決起集会で決意を語る松田一紀さん(左)と竹下良二さん(右) 11月13日、福岡の株高洋で

しました。

◆「企業存続と雇用継続」へ意欲

こうした中で、十一月二十日と十二月二日の二回にわたって、大阪府労働委員会の調整(あつせん・調停・仲裁)で両者の交渉が持たれましたが、会社側の態度は変わっていません。

十二月初旬現在、松田さんと竹下さんはまだ存続している会社に出勤を続け、解雇された労働者の穴を埋めるために日々雇用された労働者と共に、ミキサー車の運転と解雇撤回闘争に忙しく携わっていますが、その中で、闘いへの意欲を次のように語っています。

「天下の太平洋セメントがわずか数人の雇用を守る事ができない訳がありません。企業の存続と雇用を守るために、大企業の身勝手なやり方を許さないために、そして、去って行った仲間を含む、働く者みんなの生活と権利を守るために、一人で立ち上がりました。支援の皆さんの励ましを力に、最後まで闘い抜きます」。

また松田さんの妻・美田紀さんは「ここをなくしたらフロントが合併して消えてしまい、本勤ではなく日雇いや傭車屋ようくるやになって、低賃金で

「厳寒の夜、「二人はみんなのために」「みんなは一人のために」と「守る会」の決起集会に集まった人々」11月13日、福崎の㈱高洋で



何の保障もなくき使われることになります。その上、消費税が上がったら、企業は今以上に正社員をなくしていくでしょう。働く人を外注したり派遣にしたりした方が消費税対策になるからです。夫たちの闘争は、『労働者を簡単に解雇するな』『非正規でなく正社員で雇えー』という、既に解雇されたり非正規にされたりした人たちの声なき声も含めた闘いです。労働者を中けらのように扱った会社のやり方は絶対許せん。二人の子供たちの将来のためにも、最後まで頑張りたいと思っています」と語り、夫らと共に闘い抜く熱意を示しています。

◆「大企業の横暴を規制する闘い」

今回、「くっせいな生」の会社である㈱高洋が強行しようとしている企業閉鎖・営業譲渡・全員解雇は、詰まるどころ、親会社である太平洋セメント㈱の「合理化」の一環です。「合理化」そのものが悪い訳ではありませんが、会社を支えて懸命に働いてきた労働者を犠牲にして行なわれるところに問題があると思われます。

同社は二八八一（明治十四）年設立。セメントをはじめ、資源、環境、建材・建築土木、セ

ラムックス・エレクトロニクスなど広範な事業を手がけ、資本金は八六億円、従業員は一六四五名。生産拠点は国内九、海外十（グループ含む）。二〇一三年三月期決算での連結売上高は七四七六億円で前期比一九七億円増、営業利益は四〇八億円で前期比二一四億円増、株主等への配当は四九億円を超えています。

「守る会」（現会員数二八〇超）の太田稔みのる会長は「太平洋セメントのこうした莫大な利益はリストアップによって得られたことが明らかになっています。大企業がため込んだ膨大な内部留保を、働く者の雇用確保や賃金引き上げに回し、安心して生活できる職場環境を確保させることが国民的な課題になっている今、二人の雇用と生活を守る闘いは、大企業の横暴を規制し、企業としての社会的責任を果たさせるという重要な役割も担っているのです」と話しています。

高洋関連で働く仲間を守る会 連絡先は「港生活と健康を守る会」（磯路 一七二・一一〇一、☎六五七六・四八〇九、FAX六五七六・四八〇八）。年会費五百円。

あ さ や け

「まず日本語をきっちり話せることの方が大切では…」区内で教師や保護者から耳にする言葉です。今や国挙げての「グローバル人材育成」とやらで「英語がヘラヘラ話せる」ことが重視され、小学校では五・六年生に加えて三・四年生も数年後には英語が必修に、大学では東大・京大が「ネイティブ英語教員の大規模採用を、山梨大は「ほぼ全」のテキストの英語化」を打ち出しています▼このような風潮には当然ながら心ある人たちが警鐘を鳴らしていますが、中でも鳥飼久美子さんから英語専門家による提言(『英語教育迫り来る破綻』)は傾聴に値します。口々「日本人として必要な教養を身につけるためにはまず日本の言語文化に関する深い理解がなくては」いけない「明治二十年前後によつて日本語で大学教育までやれるようになった東大が、また英語での授業に戻るなんて情けない」▼そしていついたか警鐘の元祖(でもいつかは英語教師でもあった夏目漱石さん。明治四十四年、雑誌

『学生』に発表した談話で次のように述べているのです。「独立した国家といつて点から考えるとかかる(英語で講義する)ような教育は一種の屈辱」「学問普及といつて点から考えると(中略)使い慣れている日本語を用いるに越したことはない」▼かつて「大東亜共栄圏」を旗印に朝鮮半島や南の島々で日本語を強要した我が国が、今や米国の植民地並みの言語状況に陥っているのは皮肉といえは皮肉ですが、そんな中で学ぶ青少年(正しい迷惑。前号の「読者」コーナー)でも勝部泰臣さんがこの点を実いておられました。が、ここは「我々大人が奮闘努力して正しい日本語生活の先頭に立つてはありませんか▼と」いふので、まずはその手始めに本紙をじっくり読まれてはいかがでしょう。「一見えても『伊豆の踊子』を暗誦するなど美しい日本語を身につけていければいい努力にすぎません。自慢しての訳ではありませんが(ついでに)。

× × × × ×

「せつてはなまに滅茶苦茶でいじりまするがな」とは往年の名漫才師・花菱アチャコさんの名ギャグですが、近頃の日本の政治状況はこの

言葉がびつたりと思いませんか▼TPP(環太平洋経済連携協定)にNSC(国家安全保障会議、特定秘密保護法に消費増税、生活保護制度改悪に介護保険制度改悪。「よつこれだけ世のため人のためにならんことをやつてくれるわ」と感心させてしまいます。中でもTPPはアメリカ企業に、NSCと秘密法はアメリカ軍部に、共に日本の財産と情報を差し出す、いわば「亡国への一本道」。澎湃たる反対を押しつけての強行に無力を感じた人も多いのではないでしょうか▼聖書には「良い」とは上(神)から悪い」とは下(人の心)から」という意味の句がありますが、この世に限っては悪いとは上(権力者)から、良いとは下(庶民)からいふ言えるようにです。そこで、その「下からの「良い」と」の代表が本紙の記事の数々。これらを毎月しつかり読んでいけば、その鬱憤が溜まることはありますまい▼と、またまた手前味噌なことを書いてまいりましたが、そんな愚に塗れた「〇二三年も間もなくシ・エンド。締め括りに、やはり往年の名漫才師・人生幸福さんの名言詞を。「責任者出て来いー」よけいストレスしたまるがな。

積み重ねで質向上を

田中地活協が避難・体験訓練



→「訓練の積み重ねで自助・共助の質の向上を」と実施された田中地活協の「津波避難訓練Ⅱ」
11月24日朝(写真は田中小での合同訓練)

訓練の積み重ねで自助・共助の質の向上を。
東日本大震災以来、各地域で防災訓練が繰り返されていますが、このうち田中小学区(田中・夕丘)では十一月二十四日(日)朝、田中地域活動協議会(近江隆司会長)による「津波避難訓練Ⅱ」が行なわれました。二月に続き一回目。田中連合振興町会、港消防署、田中小学校、大阪市危機管理室、港区役所、港区まちづくりセンター支部が協力しました。

◆各町会で安全確認、避難ビルへ

訓練は二部に分かれ、最初の「町会別避難訓練」は午前九時に南海トラフを震源とするM9の地震が発生し、一時間後に津波が大阪港に到達するとの想定で実施。田中小の防災スピーカーから流れるサイレンを合図に、①各家庭で自分や家族の安全を確認し②無事を示すタオルなどを玄関ドアなどに結んだ上で集約場所に集まる③各班長はタオルなどを目印に班員の安全確認をして回り④集約場所で待機する町会長や防災リーダーに報告する⑤集約を済ませた町会長と防災リーダーの引率で津波一時避難ビルへ移動する一という手順で行なわれました。

←安全確認をチェックする防災リーダー①と、

避難ビル前で説明する町会長②(田中3丁目



この訓練の中では「ほとんどの家にタオルが吊るされていた」という町会もあれば「前回(三月)に比べてえらい少なかった」という町会もあるなど、安全確認の在り方にはづきが見られましたが、その理由として「回覧板の遅れなどで訓練があるの知らない人が多かった」(田中)などが挙げられていました。

◆「ロープ結索」や「三角巾」体験

このあと全十四町会は田中小校庭に集まり、合同で「防災体験訓練」を実施。田端尚伸・港区長が「回を重ね、工夫を重ねながら、実際の被災状況に対応できる訓練へ質を高めていきたいと思います」、矢田勉・田中地域活動協議会副会長が「ま

「自分を守る」と、津波では高い所へ逃げる」
ことが大事。訓練で反省点があれば次に生かして
いこうとあいさつ。四グループに分かれ、災害
時に役立つ四種類の体験訓練を行いました。

このうち「ロープ結索」講習では救助の際に
「固く結んで解きやすい」結び方として①まき
結び②もやい結び③本結びなどを、「三角巾」講
習では応急手当の際の布の折り方、当て方な
どを、いずれも防災リーダーが参加者に実際に
やってみせながら指導。参加者からは「難しい
なあ」「繰り返しやな」などの声が聞かれました。

◆「AED」や「けむり」体験も

また「AED」講習では港消防署員が「心臓は



「自分でやらんと」と積極的に体験する人が目
立った「ロープ結索」④と「三角巾」⑤の講習

止まる寸前に痙攣するが、それを正常に戻すの
がこの機械」と紹介した上で、①倒れている人
がいたら、まず意識があるかないかを確認する
②意識がなければ119番とAEDの手配を周
囲の人に頼む③その間に胸骨圧迫と人工呼吸
を繰り返す④AEDが到着したら音声通りに使
うなどと手順を説明しながら模範実演。参加
者との間では「胸骨圧迫について、そんなに強
く押したらあばら骨が折れるのでは」「折れない
より死なない方が大切。とにかく強く速く垂直
に押すこと」などのやりとりがありました。

また火災時に煙に巻かれる状態を体験できる
「けむり体験ハウス」では、通り抜けた参加者
から「視界が全滅きかんかった」「実際の火事で
は喉もやられるからパニックになるやろ」など
と恐怖が語られ、港消防署員からは避難方法に
ついて、①「有毒ガスを吸い込まないため」口
と鼻を塞ぐ②「下には新鮮な空気が残っている
ので」姿勢を低くする③「堂々巡りを避けるた
め」壁を伝うなどのアドバイスがありました。

◆「安全確認に課題」と参加者

全ての訓練が終わった後、木村武三・田中地

「質問が活発だった」「AED講習」と、「視界が
きかんかった」と恐怖が語られた「煙体験」②



域活動協議会防災担当と矢田副会長が「三〇日は
各町会での避難訓練と全町会による合同体験訓
練が組み合わされ、有意義だった」「これから
十四町会が連携し、一つになって助け合える関
係を作ろう」と結び、参加者に災害時用の「携帯
トイレ」と「水缶」が配られました。また町会長
は居残り、市危機管理室と港区役所の指導で防
災無線の使い方の訓練を行いました。

参加したある男性は「校庭での体験はとても
役立ちましたが、町会別の避難訓練では安全確
認などに課題があるのを感じました。こつして
積み重ねながら反省点を次に生かし、質を高め
ていくことが大切ですね」と話していました。

叫びたい言葉！

今月の提言者

大野 ひろ子さん(南市岡)



消費増税 絶対反対！

黙っていたら貧乏人は殺される

「税と社会保障の一体改革」とか言って、昨年八月、民主・自民・公明などが共謀して国会で消費増税法を通しました。来年四月から八割、再来年度は一〇割に上げるのだと。但し経済の状況によっては停止するといいつ「経済案項」

をつけたので、安倍首相は「あとは野となれ、山となれ」とばかりに国債乱発、税金はら撒ぎの「アベノミクス」とやらで見せかけの「景気回復」を宣伝。そして八割増税を強行するため「識者の声を聴く」演出もやってきました。そうして準備万端整えた上で、この九月、予定通り「実施」を宣言したのです。

他方、社会保障政策の方は、といえば、切り下げ・解体のオンパレード。その突破口が生活保護ハッシングと制度そのものの改悪です。本当に庶民をなめ切っています。

今からでも遅くはありません。「絶対反対」を叫びましょう。こんな政治を許していたら、貧乏人は本当に殺されます。

◆財源は大企業にあり

結論から言います。消費税を上げる必要は全くありません。社会保障の財源はあります。どこに？ 大企業と金持ちのフトコロの中に。

消費税導入以降の国の税収の内訳（一九九〇年～二〇〇四年）を見ると、消費税が四兆八千億円から九兆八千億円へと倍増しているのに対して、法人税は十八兆円から九兆四千億円へ、

所得税は二十八兆円から十三兆八千億円へと半減。消費税を上げなくても、税制を元に戻せばおとりがくるはずです。つまり「財源がないから消費税が必要」だったのではなく、「大企業と金持ちの減税のために消費税が必要」だったのです。

また企業の法人税率を見ると、ピーク時（一九八五年）の四三・三割から一九九九年以降は三〇割へと大幅に下がっています。中小零細企業は赤字企業（つまり納税ゼロ）が多いから減税で利益を増やしてきたのは専ら大企業。つまり法人税の引き下げこそが社会保障財政を逼迫させてきたのです。

「欧米より法人税が高い」も嘘。さらには企業の社会保障負担も、日本はフランスの三分の一、ドイツの二分の一と段違いの優遇ぶりです。

◆財源は金持ちにもあり

そして金持ちに対する所得税減税。かつては最高税率七五割だったのに、今は五〇割。〇三年からは相続時精算課税とやらを導入して、さらに金持ち優遇。どうも年収一千万円を境にして、それ以上の富裕層は税金負担率が激減する

仕組みになっているようです。

また、欧米に比べて課税最低限が低い、つまり低所得者からむしり取っているのも特徴で、月八万八千円から所得税が引かれます。

その一方で、株式を売って儲けた金には一〇割しか課税されません。あのホリエモンは、紙きれたった自社株を百四十億円で売りましたが、税金を引かれても百二十億八千万円が手元に残ったのです。何たる不平等でしょう。

ですから皆さん「現役世代や少数の若者が多数の高齢者を支えなければならない」と老若を分断・対立させるマインドコントロールには要注意です。財源難の本質は「少数の特権階級のただ乗り」なのですから。

◆非正規雇用も圧迫要因に

社会保障の財源を圧迫しているもう一つの大きな要因が非正規雇用労働者の増大です。

企業は正規雇用を非正規雇用置き換えて社会保険料を低く抑え、社会保障の財源を減らしてきました。この中には、現行の法制度上、加入が義務付けられているにもかかわらず「非正規」という雇用形態にして、脱法的に加入を免

れるケースも相当数に上っています。こうして厚生年金は被保険者数、適用事業者数ともに、九七年をピークに減少してきました。

非正規雇用は低賃金で不安定なので、当然納税額も減ります。高額な国民年金（第一号被保険者）保険料も払えませんが国民年金の未加入や未納も激増しています（これは個人事業主や中小零細企業の事業主も同様です）。

こうした非正規の労働者が今や四割に達しようとしています。年収一百万円以下の労働者が一千万人を超え、貯蓄ゼロ世帯（一人以上）が約二割も。一人世帯をきめればもつと多いはず

です。
このように、財界と政府が労働法制改悪によって激増させてきた非正規雇用が、社会保障制度を圧迫するもう一つの大きな要因となってきたのです。

◆大企業と金持ちからいって税金を！

最後に、小泉構造改革時代（二〇〇三～二〇〇六年）の特徴的な数字の変化を振り返ってみましょう。この間に日本の名目GDPは二十一兆円増え、資本金十億円以上の大企業の役員報酬

は二倍に増え、株主配当も三倍に増えました。が、その一方で、働く人への分配は五兆円も減ったのです。現在進行中の「アベノミクス」は、こうした大企業と金持ちの栄華を、庶民を踏み台にして再現しようとするものです。

そこで再び結論。今からでも遅くありません。「消費増税をやめろ！」「非正規職を撤廃しろ！」「派遣法改悪反対！」「大企業・金持ちへの優遇税制を元に戻せ！」「株など金融資産に大幅課税しろ！」「命と暮らしを守る社会保障の充実を！」の声を上げ続けようではありませんか！

（港合同南労会支部 ☎六八五二・四八五〇）

働く仲間の相談所
**無料**
倒産、解雇、賃金不払い、条件切下げなど何でも
困ってませんか？
港合同（南市岡3-6-26）☎6583-4858

被災地農民を支援します。
反原発の声をあげよう！
ご協力下さる方はご連絡下さい

三里塚産直野菜の会
磯路2-3-9（三社神社そば）TEL.6572-0130

地域のため30余年

区政功勞 大西史朗さん市民表彰

地域発展や福祉増進に貢献した市民を大阪市が顕彰する今年度の「大阪市民表彰」に、港区から波除の大西史朗さん（七十八）が選ばれました。「社会公益」「社会福祉」「消防」「教育」「文化」など十部門・六十一人のうちの一人で、大西さんの表彰分野は「区政功勞」で、十一月十四日、市公館（都島区）で表彰式が行なわれました。



→ 地域発展や福祉増進に尽力し、「区政功勞」で第48回大阪市民表彰を受けた大西史朗さん

大西さんは一九二五（昭和十）年、徳島県阿南市に生まれ、県立高校を経て近畿大学を卒業。十七年間の会社員生活を経て七八年に石油販売

会社、九三年に不動産会社を設立しました。そしてこの間の八一年に地元・波除で始めた町会活動をきっかけに地域活動に携わるようになり、以後、地域振興会波除二丁目町会会長、市岡東中学校PTA会長、市岡高校PTA会長、港区民生委員協議会会長、大阪市民生委員児童委員連盟理事、港区社会福祉協議会副会長、社会を明るくする運動港区実施委員会副委員長、港区人権啓発推進協議会副会長、大阪市民運動すきやねん港区実行委員会副委員長などを歴任。現在も、財団法人港区「ミニミニティ協会」評議員、社会福祉法人波除福祉会評議員、社会福祉法人港民生会理事、社会福祉法人大阪市知的障害者育成会第二者委員、特定非営利活動法人市岡国際教育協会副理事長、名誉民生委員、港区人権啓発推進協議会会長などとして活動。二〇一〇（平成二二）年にはこうした地域貢献に対して厚生労働大臣表彰を受けました。現在、一九八一（昭和五十六）年に結婚した紀

美夫人（七五）との間に子供二人、孫は二人。

今回の市民表彰について、大西さんに奉仕活動への思いなどを訊きました。

◆今回の表彰を受けて止めていますか？

この度は身に余る栄に浴し、誠に恐縮しています。三十年近く、PTA活動や地域のボランティアをさせて頂き、取り立ててこれという活動もしていませんのに、多くの方の「支援・ご協力」があつて、年と共に長と名の付くお役目を頂くようになりました。今回の表彰はそうした地域の全ての皆様に対するもので、それを私が代表して頂いたものと受け取っています。

◆長年の奉仕活動のきっかけとなったのは？

特に「世のため人のため」と構えて始めた訳ではなく、サラーマン生活を経て会社を設立した頃、町内会の班長を任され、色々なことに引っ張り出されているうちに、地域の問題に関心を持つようになり、段々と深みにはまってきた（笑）というのが正直なところですね。

◆とはいえ、仕事をしながらの種々の奉仕活動しんどいところもあったと思いますが…

しんどいところより、忙しさを戦い、こま

り時間のやりくりなどが大変といえは大変でしたが、活動そのものをしんどいと感じたことはありません。そんな中で、活動への妻の理解と協力は何にも増して力になり、感謝しています。

尤も、妻もその後、町会婦人部長やネットワーク委員長などとして活動するようになり、家の中が大変だったことがありました（笑）。

◆微笑ましくも温かなお話を。ではその一方でどんな時に奉仕の喜びを感じられますか？

この活動も地域のお役に立ち、市区民の方に喜んで頂けるということで、喜びに満ちたものですが、特に印象に残っているのは数年前、民生委員としての活動の中で経験したことです。

体が不自由で車椅子で生活をされていた高齢女性が、それまでは何とか自力でお風呂に入っていたのが、状態が悪くなって入れなくなったことがありました。そこで、本人とも相談の上、車椅子と浴槽の間に板を渡すなどして、引き続き自力で入浴できるよう家の中を改造しました。

その女性が喜ばれたのはもちろんですが、お手伝いした私も大変感激したのを覚えています。

また、その「目に見えた形だけでなく、色々

「大西さんが民生委員児童委員連盟理事として参加した不法駐輪追放運動」と、市岡国際教育協会副理事長として携わる国際交流活動



な活動の中で市区民の方から「苦勞さま」などと声をかけて頂くだけで「長く続けてきて良かったなあ」と喜びが湧き上がります。

◆そうした数多くの活動の中で、特に港区民に知ってほしい活動はありますか？

はい。現在、副理事長を務めている「市岡国際教育協会」の活動です。市岡高校の定時制課程が廃止になった一九九八（平成八）年の春「夜に学ぶ伝統を絶やすな」と始まった「市岡日本語教室」がその中心で、毎週金曜日の夜、日本で暮らす外国人にマンツーマンで日本語を教え

ていますが、単に言葉を教えるだけでなく、一年を通じて、花見や七夕などの季節行事、文楽など日本の伝統文化の鑑賞、港区民まつりなどの市区民行事、さらには中国の師範大学や海洋大学との交流などを行なっています。

その中で、日本語を学んだ青年が母国での結婚に私たちを呼んでくれるなど、いつまでも「日本のお父さん・お母さん」と慕い続けられるのを嬉しく思うと同時に、たとえ国と国が政治的にぎくしゃくしても、いついつ底辺での友好親善をしっかりと進めることで世界平和に貢献できていることを何より嬉しく、また誇りに思っています。関心ある方はぜひ参加されることをお勧めします。問い合わせは ☎〇〇八〇-三八四六・二五八一 市岡国際教育協会へ。

◆港区から世界平和を発信する、素晴らしい活動だと思います。最後に今後の抱負を一言

今回の表彰をしっかりと胸に刻み、これからも微力ではありますが、「誰もが安全で安心して暮らせる地域社会」への貢献できるように頑張りたいと思っていますので、皆様の応援をよろしくお願い申し上げます。

健康的なおもちや贈る

ハピネスが子ども・子育てプラザへ



「子供たちに健康的なおもちやを」。『ふれあい喫茶』などの活動が続ける港区のボニフィアグループ「ハピネスグループ」(糸道子代表)が、港区子ども・子育てプラザ(磯路)におもちやをプレゼントし、その贈呈式が十一月二十四日午後、月例の『ふれあい喫茶ハッピー』の中で行なわれました。

◆プルトップ回収まで購入

おもちやは、同グループが続けてきたアルミ缶・プルトップ回収で集まったお金で購入した知育玩具(積み木セット)。受け取った同プラザの吉田政嗣マネジャーは「ハピネスさんから『贈り物をしたい』とお申し出があり、幼児さんやお母さん方に相談したところ、『楽しみながら成長が促されるような積み木があったら嬉しいね』という声が出たのでお願いしました。頂いたセットは高価ですが、その分たくさんさんのピースがあり、幼児から小中高生や大人まで、年齢や発達段階に応じた楽しみ方ができる本格派。子供たちへの素晴らしいクリスマスプレゼントに心から感謝しています」と話していました。

◆「ふれあい喫茶」を中心に

ハピネスグループは二〇〇〇(平成十二)年三月、「幼児からお年寄りまでを対象にしたボランティア活動グループ」として発足。毎月最終日曜日の「ふれあい喫茶ハッピー」を中心に活動を続け、様々な趣味のサークルも結成。そこで作った折り紙、おじゃみ、ストラップ、袋などをクリスマスや母の日などに無料で区民にプレゼント。現在の会員は八十代から二十代の約五十人で、女性が大半。同プラザに対しては二〇一〇年秋に大型木製玩具を、二〇一一年秋には大型キッチンセットを、二〇一二年秋には大型ブロックを寄贈。こうした一連の活動に対し、二〇一一年秋には港区社会福祉協議会から感謝状が、二〇一二年秋には大阪市長から表彰状が贈られました。

糸代表は「これからも『仲良く、楽しく、無理なく』を合言葉に、港区のまちづくりと福祉の向上に貢献して参りたいと思っていますので、区民の皆さんのご支援・ご協力をよろしくお願い致します」と話していました。

「ハピネスグループ」についての問い合わせは

☎六五七三・〇六一五糸代表まで。

→ハピネスグループの女性たちから積み木セットを贈られ喜ぶ吉田マネジャー(中央の男性)
 〓11月24日、港区子ども・子育てプラザで

障害者の願い実現へ

あゆみバザー 今年も盛況



→障害者福祉充実への願いを込めて開催され、多くの区民でにぎわった「あゆみ福祉バザー」

11月3日、築港3丁目のあゆみ作業所で

「住み慣れたこの街で安心して暮らしたい」という障害者の願いを実現するために毎年続けられている「あゆみ福祉バザー」が今年も十一月三日に築港の同作業所で行なわれ、多くの区民で賑わいました。主催はNPO法人大阪港あゆみ福祉会が運営する「生活介護・あゆみ作業所」二十人定員の主に知的障害者が通所する指定障害福祉サービス事業所。

雨模様の空の下、同所の庭や塀の外には、年間を通じて区民から寄せられた衣料や食器などの日用品が所狭しと並べられ、朝十時から午後三時の間に次々と売れていきました。中でも四五円袋に古着詰め放題で五百円という今年の目玉企画は大人気。来場者のために設けられた「喫茶コーナー」では同作業所の利用者たちが注文受け・片付け・洗い物などに大忙しでした。

◆「こんな形で支援したい」と参加者

音楽CDなどを買い、喫茶コーナーで紅茶とケーキを味わっていた三十代男性は「毎回参加していますが、障害者の方たちの明るい表情と声が印象的で、こちらも元気づけられました。」

障害者福祉には行政も力を入れていますが、不

充分です。市民として今後こんな形で支援していきたいと思っています」と話していました。

◆「日曜作業所」からスタート

あゆみ作業所は一九八二年、難波養護学校生の父母が中心になり、「日曜作業所」としてスタート。「住み慣れた地域で働き、暮らし、社会参加したい」「語り合える仲間がほしい」という障害者とその家族の切実な願いにこたえて活動を続けてきました。

一九九一年には弁大へ、二〇〇四年には築港の現在地へ移転。〇六年十月にはNPO法人の認証を受け、〇七年七月には新施設の完成と共に指定障害福祉サービス事業所へ移行し、新たな歩みを始めています。現在、十五歳以上の重度知的障害者、重複障害者が通っています。

◆求められる区民の支援

同作業所では利用希望者に「気軽に見学を」と呼びかけると共に、事業の一層の充実のために区民の支援を募っています。その方法の一つが「応援する会」への入会。入会方法・年会費など詳細は同作業所（築港二・一〇・一八、☎六五七二・〇七二四）へ。

情報隠し

池島一・勝部素臣80歳

「……情報を隠したり歪めたりするこの好きな人たちがずいぶんいるみたいです」。誰ある? 『ひょろひょろたん島』の作者、故井上ひさしの『ふふふ』という随筆(小説現代「二〇〇五年七月」二〇〇九年九月)に連載に「情報隠し」の題名で掲載された中の一文だ。そこには次のようにある。

——昭和十六(一九四二)年十二月初め、米国「シントン」で戦争回避のための交渉に当たっていた日本の二人の大使がハル国務長官に提案しました。「行き詰まっている日米交渉に新局面を開くには我が国の天皇陛下とルーズベルト大統領閣下との間で親電を交換して頂くしかありません」。そこで大統領は十二月七日(日本時間)に天皇に宛てて親電を打ちました。三つまでもなくこの日は真珠湾攻撃の前日でした——

内大臣(天皇の相談相手)木戸幸一の『木戸日記』の十二月八日の項に「午前零時四十分米国大統領より陛下に「親電」とある。ひょろ、これ

は歴史的事実だそうだ。そして誰かがそれを隠して、陛下に届いたのは真珠湾攻撃が終わった後だったという。何でも当時の陸軍は「すべての外電はその配達を十時間遅らせる」という方針を立てていたそうだ。

これはほんの二つの例だ。今、お国のため、そして国民のためにと表向き言いながら「秘密保護法」が成立したが、これ説明不足のまま、不安が先行してしまふ。「日本の孤立化に拍車がかからねばよいが……」と嘆きの声が出るのも当然だ。

公園トイレの洗浄、業者指導は?

(市岡・70代M)

地域の環境に関心があります。前から公園トイレの便器の汚れが気になり、ある公園のトイレ便器を撮影して十月半ばに公園事務所へ出向き、「市民が気持ちよく過せるはずの公園のトイレがこれでは……」と苦言を見せ、「トイレ清掃は誰がどれだけしているのか」「市が委託した業者が週一回している」「業者の点検・指導はしているのか」「トイレ」「それならもっと徹底して

←Mさんが指摘した区内の公園トイレ便器の汚れ①と、Mさん自ら洗浄した後の便器の状況

②いずれも11月1日朝、Mさん撮影



た指導を「このやり方」をしました。その上で、一週間後の十一月二日朝に同じ便器を調べると、やはり排出口の底に便がこびりついた状態は変わらず、それを撮影の上、自分で用意したタワシと洗剤で洗つと、簡単に汚れが取れました。「素人でも出来ることをなぜ専門業者が……」と腹立たしく思い、すぐ公園事務所へ写真(右)を持って訪れ、再度改善を求めた次第です。業者に委託するのは「スタダワン」の必要なことから仕方ないかとは思いますが、それなら点検・指導を徹底すべきです。些細な問題がもしも皆さんが、読者の皆さんはいかがお考えでしょうか。本紙から Mさんが指摘した問題について

十一月十九日に大阪市建設局公園緑化部・大正公園事務所（田中）を訪ね、西尾所長に事実確認したところ、「経過はこの通りです」ということでした。その上で、「その後（Mさんが事務所を二回目に訪れた直後）、業者を呼んでMさん



→本紙で11月20日午前中に確認した区内の公園トイレの便器の状況。右上から時計回りに波除・磯路中央・入舟・三先の各公園（波除と磯路中央は排出口に若干の便が付いているが、撮影のタイミングにもよるので、必ずしも業者の洗浄作業の質が原因とはいえない）

の写真を見せ、清掃作業の質の向上を求めたので、本所が管轄する都市公園（港区内では三十一カ所のトイレ便器の状況は改善されました。今後とも業者への点検・指導を徹底するつもりです」ということでした。なお、その翌日（十一月二十日）の午前中に本紙で確認した区内四カ所の公園トイレの便器の状況は上の写真の通りです。こうした経過の上で、さらに感想・意見などあれば、投稿して下さい。

.....

赤レンガ倉庫の保存・活用は市民協働で

区内・40代公務員

いつも投稿意見を載せて頂き、感謝と共に責任も感じます。公務員としてやはり「赤レンガ倉庫を賃貸へ」（前号1頁）に目が留まりました。長年閉鎖されていた赤レンガ倉庫を再活用するという決断は良い、というか、行政として当然としても、そのやり方がまたもや「民間委託」ということであれば、その意図そのものにさえ疑念を感じます。つまり、貴紙が最後に指摘されているように、「賃貸料収入による一時的な財政改善」こそが本当の目的ではないのかと。結

同じくでもまた、本来手段であるはずの「財政健全化」が目的になってしまっているという、大阪市だけではない、全国的な流れが見えます。記事には区民お二人の意見が載っていますが、共通しているのは「再活用は歓迎だが民間で大丈夫か」という不安です。こういった善意の気持ちを大阪市は真剣に受け止め、できるなら事業者公募を今からでも撤回し、港区の産業遺産・歴史遺産の保存と再活用に向けた市民協働、つまり地元住民を含めての検討を進めるべきではないでしょうか。必ず良い知恵が出てくるはず。そして、市民協働とはこういった問題のためにこそあるのだと信じます。

.....

雨の赤レンガ倉庫、美しかった驚きも

市國元町・64歳女性

紅葉の美しい季節となりました。先日（十一月十日）、「天保山まつり」の「カメラで築港・天保山めぐり」の案内をして下さったのが、「赤レンガ倉庫を賃貸へ」（前号1頁）の中で「コメントされていた福田頼隆さんでした。あいにくの雨のため、参加者は、申し込みのあった十五名

中々でしたが、天保山までの二時間、福田さんは丁寧に説明して下さいました。再発見が多く、また時間を見つけて訪ねてみたいと思いました。そのコースの中に赤レンガ倉庫がありました。内部も一部見せて頂きましたが、その時倉庫の壁を這^はっていた「鷺もみじ」が余りにも美しかったので、何枚か拾ってきました。

区民イベント、盛り沢山な方がいいのか？

磯路・60代女性

毎週地域の充実した記事を楽しんでいます。その中で「爽やか秋空に歓声 新『区民まつり』」多彩な催し「前号6頁」を読んで思ったことがあります。それは、区民イベントは盛り沢山であればいいのか、とついつい思います。例えば、この「港区民まつり」には私も主人と参加し、多目的広場での運動会の様子ものぞき、八幡屋公園での色々なイベントも見えて歩き、二人で体力測定もさせてもらいましたが、全体的に、これまでとすっかり様変わりしているのに驚きました。去年までは確か、夏休みの夜に歌や踊りが行なわれていたと思いますが、開催時期が秋に

なり、内容も運動会が中心になっていました。それは良いとしても、余りにも盛り沢山過ぎ、場所も広すぎて、ちよつと広い、とつつか、注意や関心が散漫になって落着けない気がします。



→ 読者の作品から辻悦子さん

(市岡元町3) の絵手紙

ました。せっかく大勢の方が準備して下さいただ催しですから、できればこれも楽しんでおきたいのが人情ですが、「これではよっぽど入念に計画を立てて回らなければ全部は楽しめないように思いました。同じく、そのあとに行なわれた「港区民文化のついで」や「天保山まつり」にも言えます。色々と考え、区民と相談もした上で計画されたのだと思いますが、今後のことでもあるので、あえて提言させて頂きました。

港区民の底力示した「ちかっぴん」

弁天・60代男性

「食べた走った笑った! 『ちかっぴん』」『雨にも負けず』(前号6頁)を読んでも、当口は雨だったので、当然中止になったとはかと思っていましたが、午後、みなで通を走るランナーを見て目をうたぐりました。そして、それだけで、もつ港区民の底力とつつか、と根性を感じ、胸が熱くなったものです。記事によると、参加者が八百人でボランティアも八百人だったとか。あの本降りの中でよくそれだけの方が動いたものだと思ひました。こまめ

に拾い上げた参加者やボランティアの声も楽しく、逆境の中でこういつ大掛かりなイベントをやり遂げた港区民の貴重な歴史の記録にもなると思いました。

.....
冬から春へ、猪伏少年がんばれ！

(南市岡・70代女性)

毎号「戦争体験」に心打たれています。今月(前号38頁)も、経験した者でないし書けない、リアルで詳細な記述に感心しました。その中で日本人墓地の凄惨な様子にはさすがに心痛むものがありました。冬から春へ、春から夏へと季節が移り変わるにつれて引き揚げの観測が真実味を帯びていく件に希望と明るさを感じました。猪伏少年の健全な奮闘がいよいよ報われる時が来るようです。『頑張れ！』と心からのエールを贈りながら、次号を楽しみにしています。それから「あさやけ」に「二冊三冊は高いか安い」とありましたが、私としてはこれだけの内容でこの値段は「安すぎるくらい」だと思います。

老人クラブの愛と知恵とパワーに脱帽

(久保・50代女性・元教師)

「楽しみながら被災地支援 区多連」さんまつり『超活況』を読んで。三陸沖の秋刀魚を大量に仕入れ、楽しみながら東日本大震災被災地を支援するといふ、港区老人クラブ連合会のユニークな発想、その愛と知恵とパワーに脱帽です。特に、ずらりと並んで秋刀魚を焼く男性たちの姿に勢いを感じました。外で秋刀魚を食べる女性や男性の表情も明るく、インタビュアの中、学生ボランティアたちの優等生的な答へには思わず笑って(失礼！)しまいました。病身ゆえ余り外出することはありませんが、こんな楽しい催しなら、来年はぜひ参加したいものだと思います。

マジジャンのイメージ変わった

(八幡屋・50代商店主)

「健康的な奮闘」でみなと麻雀大会、桐本さん優勝」を読んで。酒・煙草・賭けが付き物のマジジャンを「知的スポーツ」としてみんなで健康的に楽しんでもらわれる様子が紙面から伝わら、

マジジャンといふものに対するイメージが変わりました。優勝した男性の「コメントや明るい表情からも、それはつかがえます。珍しいイベントを取り上げた小さな記事ですが、娯楽本来の在り方を問う貴重なメッセージが含まれていると思いました。

面白くて考えさせる「あさやけ」

(築港・40代女性)

ネット読者で「あさやけ」のファンです。いつも面白くて考えさせてくれます。今月(前号)はロックコンサート(前号32頁)をネタにした二つ目が特に良かったです。演奏者や聴衆のものすごいパワーに「あの元気を生かせる場所今の日本に果たしてあるのか」と突っ込む鋭さや、「無心に叫び、飛び跳ね、拳を突き上げていた若者を無性に愛おしく感じた」という優しさや心に残りました。ちょっとした出来事からこんな風に人生や社会の問題を考えさせてくれるところが、毎号勉強になっています。毎号ただで読ませてもらうって感謝しています。

あれこれガイド

●緑の地球ネットワーク(GEN) 中国山西省

大同市(だいとうし)の黄土高原(こうげん)で一九九二年から緑化協力を続ける認定特定非営利活動法人「写真左」は活動イメージ▽GEN自然と親しむ会「里山の成り立ちを見に行こう」＝一月二十八日(日)十～十五時頃、大住克博さん(森林総合研究所関西支所)の案内で、高級炭「菊匠」の産地でも知られる能勢妙見山付近の里山を歩き、人と自然との付き合い方やその成り立ちを学ぶ。能勢電鉄「妙見口」駅前に十時集合。参加費七百円。持ち物は飲み物、弁当、雨具、歩きやすい服装・靴。申込締切二月十日(日)いずれも詳細はGENの事務所(市岡一・四・四・五階、公六五七六・六二八二)へ。



●日本クリニクラウン協会 入院生活を送る子どもたちの病室を定期的に訪問し、遊びとユーモアを届け、子供たちの笑顔を育む道化師「フリニクラウン」の活動を普及・推進する特定非営利活動法人。二〇〇六年から港区を拠点に全国で活動。二年度は三病院を二八四回訪問、約二万人の子供と関わった「写真上」は活動イメージ▽クリニクラウンになりたい人のための「選考会向け直前講座」＝一月十三日(月祝)十～十七時に大阪府赤十字血液センター七階研修室で。内容は選考会に向けてのレクチャーとトレーニング。定員五十名。参加費無料。申込締切二月十二日(金)十五時(日)いずれも詳細は同協会(築港二・七・五港振興ビル305A TEL・FAX:六五七五・五五九〇)へ。

●書き初め・書道展 「書を通じて地域のふれあいを」と毎年始め開催される恒例行事。一月二日(木)十～十四時に天満宮(二先一・五・四〇、港南中学校北隣)の社殿で。墨・筆・半紙は用意されているので持参しなくてもよい。参加費無料。神前奉納も可。主催は同天満宮奉賛会(貴田太五会長)。問い合わせは公六五七

六五七五・五五九〇)へ。

一・〇五二七大満宮へ。

●ムチ打ち(首・腰) 無料相談会 交通事故でムチ打ち症になった被害者を対象とした無料相談会。十二月十二日(日)十～十八時に行政書士のむら事務所(築港二・七・一・六〇八)で。一人約一時間。事前予約制(電話かメールで)。「どうしたら正しい補償が得られるかをアドバイスします」事故後、早めの相談が良い結果につながります(同事務所・野村光恵さん)。Eメール:info@jikkou110.com、omura.com、TEL:六五七六・六〇七八、FAX:六五七六・六〇七九。

●中蔵哲演 講演会 原発反対の市民運動、宗教者運動を続ける福井県小浜市「明通寺」の住職・中蔵哲演さんが「若狭と京阪神つながろう」地に、土に、海に根ざした運動をと呼びかける。他に「原発めかん」橋下いっちゃん「弾圧やめ」と訴える報告やライブや落語も。十二月十五日(日)十五時半から港区民センターで。入場無料。問い合わせは主催の実行委員会「三木玉造」(TEL・FAX:六七六二・〇二二一、メール:tamazoo@fantom.org)まで。

秋空の下に庶民の息吹

池島ふれあいまつりに数千人



→秋空の下に庶民の息吹が溢れた「池島ふれあいまつり」。至る所に出会いと交流の花が咲いた11月23日、池島公園（写真は正午前）

澄み切った秋空の下、至る所に出会いと交流の花が咲き、庶民の息吹が漲っていました。毎秋恒例の区内最大級の地域文化イベント「池島ふれあいまつり」が今年も十一月二十三日に池島公園で開催され、数千人で賑わいました。主催はこれまでの池島地区社会福祉協議会と海の子学園池島寮に今回初めて池島地域活動協議会が参加。日赤奉仕団地域振興会池島連合と港区民生委員協議会女性部会と池島小学校と同校PTAが協賛。三十二回目。

★地域の絆が強まるよう

午前十時、池島寮の子供たちによる元気一杯の「南中ソーラン」でオープン。開会式では貴田太五実行委員長（池島地区社会福祉協議会会長）がこの催しの歴史に触れ、「昭和五十八年『お年寄りから子供まで誰もが大事にされる地域にしよう』と池島小で始まり、会場をこの公園に移し、内容を充実させながら続けてきました。毎年七千人以上が参加し、港区全体を巻き込む規模に発展したのは地域活動の積み重ねの賜物。この催しを通じて、人と人とのふれあいが更に深まり、地域の絆が更に強まるよう願

「爽やかに開幕を飾った池島寮の南中ソーラン」と、感動を呼んだ池島小3・4年生の演奏②



っています。鈴木良彦実行委員会参与（池島小校長）は、同校の学習発表会を兼ねるというこの催しの特徴に触れ、子供たちは緊張していますが、地域の人々との繋がりを感しながら発表することは貴重な体験であり、大切な心の財産になるでしょう。子供たちの頑張りには盛大な声援を」とそれぞれ挨拶しました。

★歌や踊りが次々舞台へ

このあと舞台では午後二時半頃まで、池島保育園児の歌と踊り、池島小児童の学習発表、池島小生涯学習ルームのコーラス、港中吹奏楽部の演奏、あゆみ作業所の歌と踊り、少年少女空手の演武、関西フィルメンバーの演奏などが

次々と登場。最後には抽選会で盛り上がりました。

「このうち学芸会を兼ねた児童や園児の舞台にはカメラを向ける保護者の姿が至る所に。その中で三・四年生は「最初は難しくて挫折くじなりましたが、負けずに続けました」と練習過程を振り返った後、「みんな違ってみんないい」とのメッセージを込めた合唱朗誦や合奏を元一杯に披露。声援と拍手が鳴りやみませんでした。

★模擬店やバザー盛況

バザーや飲食模擬店、魚市いしや野菜市、餅つきなどの「コーナー」では、立ち込める匂いにおや湯気ゆげの間から「安いよ」「おいしいよ」などの呼び声。ふれあい喫茶や健康相談にはお年寄りが集



→可愛い演技に声援が飛んだ池島保育園の踊り
⑤と、会場に元気与えたあゆみ作業所の歌⑥

い、ミニスリ、トランプリン、金魚すくい、人形劇などには幼児らの歓声が絶えず、囂わらわ草履作わらわじゆりなどの「コーナー」では子供たちが高断者から真剣な表情で物作りを教わっていました。

★「ちゃんこ鍋」の賑わい

ぶつからないと歩けないほどの人、人。幼児に餅を食べさせながら手を引くヤンママ。焼きそばをかきこみながら歩き回る若者グループやカップル。中央のテーブル席では我が家にいるかのようなリラックスした表情で飲食する家族づれや、穏やかな笑顔で舞台上に拍手を送る老夫婦。「お久しぶりやな、元気が二はい、何とか頑張ってます」などと言葉を交わす恩師と教え子。地域のあらゆる層と世代せだいが集い、至る所に出会いと交流の花が開きます。「何でもあり」の会場はさながら「ちゃんこ鍋」。庶民の活力が晩秋の冷気を吹き飛ばしたかのようはるあきに感じられました。

★「地域パワーに圧倒された」と参加者

三歳の長女を連れて会場を回っていた玉川聡之さんたけし（四四）（田中）は「のぼりを見て初めて参加しましたが、舞台の催しから飲食屋台ま

「今年も人気拔群すしだった片山秀文さんのミニSL運転⑤と、たけのこ学童保育の餅つき⑥



で、何でもありの凄すしい熱気にびつくりしました。これだけの準備をされる地域の方々のパワーにも圧倒されましたね。」

また中央のテーブル席に腰かけていた男性（六九）（池島）は「今日は子供一人、孫一人を含む親族十一人で来ました。普段はみんなばらばらに暮らしていますが、毎年こうして集まって色んな「コーナー」を楽しんでいます。」

また会場で「学童保育の充実」を求める署名を呼びかけたり「伝承遊びコーナー」で剣玉けんたまを教えたりしていた「千代男性」らは「学童保育の指導員をバイトでしています。放課後の子供たちを育てる大切な仕事なので、できれば正指導

員として長く続けたいと思っています」「そのためにも条例化や予算増額が必要で、そのことを大阪市や府に求め、大勢の人が集まるこの催しでも訴えています」などと話していました。

★ボランティアも喜びの声

また「わら子芸コーナー」で臺草履作りや折り紙遊びの世話をしていた七代女性（池島地域ネットワーク委員会）は「ボランティア活動はこのまつりが始まるずっと前からしています。（臺草履作りに使った草は）二十人ほどが何日も前から毎日二〜三時間かけて叩き、軟らかくしてからここに持ってきます。硬いままだと扱いにくいですがからね」と話していました。



→老人と子供の交流が微笑ましかった臺草履作り①と、長蛇の列ができた鮭の下ろし販売②

また「プー」「カン・ビン」「ペットボトル」「燃える」「ミ」の四種類に分けた「ミ」箱のそばで「それはカン」「それはプー」などと声をかけて誘導していた三十代男性（池島寮のボランティア）は「去年までは一カ所に大きな「ミ」箱を置いていましたが、今年からこんな形になりました。今のところうまく行っていると思います。ボランティアは今年で四年目ですが、この催しは学校と地域が力を合わせて取り組むところが素晴らしいと思います」と話していました。

★心合わせる大切を学ぶ

地域のふれあいを目的に、あらゆる層が一年がかりで準備を進め、当日でも音響・進行・案内・清掃・防犯・自転車整理など細部にわたって任務を分担し、三十年超という長期にわたって続けられてきた「池島ふれあいまつり」。今、個人主義が幅を利かす中で失われつつある「心を合わせるこころ」の大切さを地域の大人たちが身をもて以て青少年に示し続けている——活気の中にそんなことも見えてくる催しでした。

★予算面で厳しくなったと関係者

その一方で、今年度、港区の全小学校区で「地

→分別ゴミ箱へ誘導するボランティア青年たち

①と、自転車整理に忙しい実行委員の男性②



域活動協議会」という新たな組織が発足し、これまで大阪市から各団体へ個別に下ろされていた補助金を、今年度からはその組織が区役所からまとめて受け取って事業ごとに配分する形になり、この催しでも今回そのやり方が適用されたことについて、実行委員会のある男性は「予算面で格段に厳しくなりました。（補助金総額が減るといわれる）来年度からはもっと厳しくなるでしょう」と今後の運営に不安を見せていました。地域活動の先頭に立つ人たちのこうした声を受け止め、その不安を解消し、意欲を支援する方向で地域活動の在り方が検証・改善されることが求められます。

労働者と住民が一つに

港合同「交流秋まつり」盛況



「秋の一日を労働者と地域住民が一緒に楽しもう」と十一月十日（日）、南市岡二丁目の田中機械構内で「交流秋まつり」が開催されました。

三十五回目。港区を中心とする中小企業労働組合の集まりである全国金属機械労働組合「港合同」と同もちつき実行委員会が主催、「平和と福祉」を掲げて活動する特定非営利活動法人「NPOみなと」が共催。雨をういて数百人の労働者と地域の人々が集まり、舞台での演芸や屋台での飲食、バザーなどを楽しみました。

◆カラオケやタンゴ、抵抗歌も

舞台ではカラオケ大会に始まり、抵抗歌シンガー趙博^{ちやうはく}さんの歌や、勤労者歌手・金野広美^{かねのひろみ}さんのアルゼンチンタンゴ、労働者バンドの演奏新舞踊、ジェスチャーなどが次々と登場。屋台では地ビールやおでん、焼きそば、焼き鳥などが低料金で売られ、争議組合支援のバザーは完売の盛況。「将棋」「ナー」や「ごも」「ナー」、また初登場の「血圧測定と介護相談」（NPOみなと合同ケアセンター）も賑わっていました。

最後は全員参加のビンゴゲームで盛り上がった後、万国の労働者の団結歌「インターナショナル

← 迫力ある抵抗歌で盛り上げた趙博さん（上）と、新舞踊「雪の細道」で魅せた梅里秀月さん（下）



ル」を合唱、高揚のうちに幕を閉じました。

◆「消費税や原発に関心」と労働者

参加者のうち、「地底旅行」（田中機械構内のレストラン）の地ビールを手に、友人と喋りながら舞台上に拍手を送っていた松島浩一^{まつしまこういち}さん（四九（磯路）は「港合同の島」金属支部（福岡）から毎年参加していますが、舞台では毎回新しい顔ぶれが見られて新鮮です。勤続十九年で組合を通じて色々なことを学んできましたが、最近では消費税に関心があり、企業減税が先に立ち、福祉目的といったてまもなくなくなった増税は許せません。また東京オリンピックが決まりましたが、それに電力をたくさん使うということで原発を続ける口実にされないか、心配です」と話していました。

→ 労働者と地域住民の一体感が印象的だった

「第35回 交流秋まつり」（写真はカラオケ大会）11月10日、南市岡の田中機械ホール

弁天クラブが4度目栄冠

市長杯バレー 20チーム熱闘



→20チームが熱戦を繰り広げた市長杯バレー
 11月17日、港スポーツセンター(写真は
 決勝で波除女性会の攻撃を防ぐ弁天クラブ)

港区バレーボール連盟(萩野久美子会長)主催の「第十二回大阪市市長杯・港区女子バレーボール大会」が十一月十七日、港スポーツセンターで開催されました。二十チームによる熱戦の末、弁天クラブが優勝、波除女性会が準優勝を飾りました。

朝九時からの開会式では主催者を代表して萩野会長が「猛暑から真冬並みの寒さへと気候が激変する中、体調と安全に気を付け、四区大会出場をめざして頑張ってください」、来賓を代表して奥野正美市会議員が「グラチャンバレーでの日本女子チーム活躍にあやかっけて優勝めざして頑張ると共に、アフターバレー(打ち上げの宴)も楽しみ、良い一日に」と選手たちを激励。しろはとの折田ひとみ主将が「日々の練習の成果を遺憾なく発揮し、フェアプレーによる白熱した試合でこの市長杯を盛り上げ、全チームが優勝へ向けて全力で戦つてことを誓います」と爽やかに宣誓しました。

●懸命の攻防が感動呼んだ決勝

試合は九時半から夕方六時半に及び、三コートに分かれた予選での上位四チームが決勝トー

ナメントに進出。準決勝では波除女性会が港中OBを対〇(二対七、二対二〇)、弁天クラブがMISAKIを対〇(二対二三、二対一七)で破つて決勝に進みました。

決勝では四試合目であつて疲れがピークに達する中、共に声を掛け合い、気力を振り絞つての攻防が感動を呼びましたが、鍛え抜かれたしーブ力に加え、金城、小田の両エースを中心に伊井、杉森、栗田、中尾、西川、奥澤、高尾の九枚アタッカーという攻撃面での層の厚さを誇る弁天クラブが、ベテラン中心で試合運びには定評があるものの攻撃面でやや迫力を欠いた波除女性会を終始リード、二対〇(二対二



→爽やかに宣誓するしろはとの折田ひとみ主将

六、二二対一八で勝利を収めました。波除女性会の二枚アタッカー（西本、山下）を封じた弁天ワのブロックの高さも光りました。また第二セットの終盤には互いに譲らぬフリーが一分間を超えて続く場面もあり、会場から両チームへ惜しみない拍手が送られました。

弁天ワは予選から全てストレート勝ちでこの大会二連覇を果たし、通算では四度目の頂点。

既に八月の連盟杯優勝で手中にしていた四区大会（来年六月）への出場権を重ねて実力で手にしました。波除女性会も予選を全てストレート勝ちのトップで通過。第四回大会以来三度目の栄冠は惜しくも逃しましたが、絶えず優勝争いに絡む安定感は今大会でも健在でした。

●相互審判など裏方でも活躍

決勝と同時に行なわれた三位決定戦ではCH-1KKOが港中OBBを二対〇で降し、三、四位が決定。このほかのチーム（五位以下）はO-J-6SEED⑦港南⑧しほは⑨八幡屋クラブ⑩港南OBB⑪波除小PTTA⑫南市岡クラブ⑬南市岡女性会⑭CH-1KKO⑮AUNTS⑯港南PTTA⑰築中OBB⑱TANAKA⑲港晴

←弁天クラブとの決勝戦第一セットでスパイクを決める波除女性会・山下選手⑩



クラブ⑳LEONKも㉑この練習の成果を發揮して健闘し、試合に敗れたあとも閉会まで相互審判や応援、清掃などで大会進行を支えました。

閉会式では一、二位への表彰と共に、相互審判など裏方での活躍を讃える「やる気になった

で賞」SEEDが受賞が設けられるなど、参加チームへの配慮が見られました。

なお、会場にはこいずみ鍼灸整骨院（弁天一丁目など港区内外に土店舗）のスタッフ二人が常駐。脚の痙攣、筋肉の使い痛みなどを訴える二十数人にテーピングなどの応急処置を施し、選手たちの安全を支えました。

●新旧交代が定着しV4

大会終了後、優勝・準優勝チームに感想を訊きました。

優勝の弁天クラブは弁太小PTTAチームを母体に結成されて二十数年。数下俊文監督（港区バレーボール連盟副会長）の厳しくも質の高い指導のもと、同小体育館で毎週一回（一時間と二時間）の練習を重ね、港区の各大会では長年にわたって優勝争いの常連となってきました。年齢幅は三十代から六十代。

藤川博子主将は「新旧交代を図ってから二大会続けて優勝できたことが何より嬉しいです。

今日は予選で苦しい試合が続きましたが、準決勝からエンジンがかかりました。レシーブ、サーブ、アタックなどの基本は全員がほぼ出来て

←2年連続4度目の優勝を果たし、充実感に浸る弁天クラブ（後列右端は祝福する港区バレーボール連盟・萩野久美子会長）



いるので、これからは各目のプレーの精度をさらに高めることをめざし、四区大会では港区代表に恥じない試合をして、できれば連覇したいと思っています。個人的には、六年間主将を務めてきた私の最後の一年を素晴らしい成績で飾ってくれたチームメイトに心から感謝しています」と話していました。

●田熟のつなぎバレーで準V

一方、準優勝の波除女性会は結成三十数年。年齢幅は四十代から七十代。パワーやスピードでの弱点を、徹底したレシーブとつなぎ、相手の隙を突く巧みなプレー、田熟した試合運びなどで補いながら、絶えず優勝争いに絡み、港区の生涯スポーツの模範ともなってきました。毎週一回、波除小体育館で、時間の練習を重ねています。

富澤良子主将は「決勝戦の第二セット冒頭で相手サーブにすぐすると矢点を重ねてしまったのが悔やまれますが、全体としては、うちの持ち味であるつなぎのバレーが発揮できたと思います。『どっせ最後まで会場に残るのなら勝つて残ろうよ』と誓い合って出場したので、結果に

←準優勝にも爽やかな笑顔をみせる波除女性会（後列左から港区バレーボール連盟・浜口伊知江副会長、薮下俊文副会長）



は満足しています。これからも、二枚アタッカーでノーブロックという前面の弱さをカバーしながら、レシーブから徹底してつないでいく私たちのバレーをさらに磨いていきたいと思っています」と話していました。

三先小が未初の5連覇

区Pバド大会 16チーム熱闘



→自主運営事業として2巡目に入り、きびきびした運営が印象的だった港区PTA協議会親善バドミントン大会（写真は開会式の模様）

港区PTA親善バドミントン大会が十一月十日（日）、港スポーツセンターで開催されました。港区PTA協議会が主催。港区教育親和会が後援。十八回目。十八チームが熱闘を繰り広げ、三先小が未初の五連覇を飾りました。

◆「雨にも負けず」と激励

開会式では大川裕之・港区PTA協議会会長（波除小学校PTA副会長）が「悪天候のもとの開催だが、本番前の練習の熱気に皆さんのやる気を感じた。去年から自主運営となり、試行錯誤を繰り返してきたが、皆さんの協力でスムーズに運営できるようになった。大阪府柔道整復師会など多方面からの協力にも感謝したい」と主催者あいさつ。馬場副区長が「外の雨に負けない笑顔に感動している。皆さんの元気で港区の活力アップを、井上衆議院議員が楽しく、安全にも留意しながら、口頃の練習の成果を発揮して、港区教育親和会・橋本会長が「外の雨を吹き飛ばす熱気で心に残る素晴らしい一日にこそそれぞれ祝賀や激励の言葉を贈りました。」

◆ユーモア宣言に沸く

このあと築港中PTAチームの市原裕子主

←笑顔で宣誓する（左から市原裕子さん・塩田和美さん①と、熱戦を繰り広げる選手たち②



将と塩田和美副主将が「私たちは今日のこの日のために、仲間と時間を作り、家族もバドミントンに巻き込んで日々練習を重ねてきました。去年負けたチームには倍返しだ！ 目指すはただ一つ、テッペンを取ったでござい！ 今日若いお父さんお母さん、腰痛かかえたパパさんママさんも、みんなで一日バドミントンを楽しむことを、ここに誓います」と身振りを交えて選手宣誓。ユーモアと元氣溢れるパフォーマンスに会場は爽やかな空気に包まれました。

◆池島小が準V、港南中3位

試合では予選リーグ（各四チーム総当たり）とその順位に基づく順位決定リーグ（同）が行

なわれました。このうち優勝を争う一、四位決定戦では各予選一位の四チームが激突。三先小が優勝、池島小が準優勝、港南中が三位に入りました。以下、④市岡小⑤田中小⑥弁大小⑦南市岡小⑧港中⑨築港中⑩波除小⑪港晴小⑫築港小⑬磯路小⑭市岡中⑮八幡屋小⑯市岡東中の順。

三先小は予選リーグ、順位決定リーグを通じて無敗と圧倒的な強さを発揮して大会史上未だの五連覇を達成。昨年単独トップに立った通算優勝回数も六に伸ばし、弁大小、市岡中の四回をさらに引き離しました。池島小は予選リーグで無敗、順位決定リーグでも優勝候補の港南中を破るなどして過去最高成績（平成二十一年度の二位）を上回り、着実な進境ぶりをアピール。港南中は予選突破もぎりぎり、順位決定リーグでは池島小に惜敗するなどして、またも悲願の初優勝はなりませんでしたが、二位に踏み留まり、昨年まで四年連続準優勝、通算準優勝八回という実力チームの意地を見せました。

◆「自主運営が田滑」と講評

閉会式では港区PTA協議会・宮本隆司副会長（池島小学校PTA会長）が講評に立ち、「こ

このコートからも歓声や悲鳴が聞こえた」と全チームの激しくも楽しげなプレーぶりや親善の様子を振り返り、その中で「重圧をものともせ



→大会史上未だの5連覇を成し遂げた三先Pチーム。落ち着いた笑顔に王者の風格が漂う

ず五連覇を果たした三先小の盤石の戦いぶり」を讀ると共に、運営については「昨年初めての自主運営事業がこの大会であり、これで一巡したことになるが、バドミントン連絡会を中心に、選手の皆さんが本心に良く協力頂き、田滑に運営できた」と報告。今後このバドミントンを契機に区P活動をはじめ単位PTA活動にも「理解・協力」と呼びかけました。

なお大会を通じて大阪府柔道整復師会の施術師が会場に待機し、肉離れや捻挫などへの応急処置を施すなどして選手たちの熱闘を安全面からサポートしました。

◆プレッシャーの中で5連覇達成

大会終了後、表彰チームに感想を訊きました。優勝した三先小Pの梅木正信総監督（三九）は『五連覇達成』を目標に出場したので、その通りになって、まずホッと、その上で嬉しさに浸っています。昨年この大会が終わってから一年間、三先小学校の講堂で毎週水曜日と金曜日、一人ひとりのレベルアップとペアプレーの習熟を重点に練習を重ねてきました。優勝できたのは、一人ひとりの『負けたくない！』

という強い気持ち、それに選手層の厚さかな。反響品を挙げるとすれば、優勝を重ねることに強くなるプレッシャーの中で普段通りの力を出し切るという点で、まだ不十分だったことでしょう。来年の目標は当然八連覇です。それに向けて、卒業メンバーが多いので、まずは新部員の募集が課題となります」と話していました。



↑過去最高の準優勝に沸く池島小Pチーム

◆過去最高を超える成績に満足

わたりたかお

準優勝だった池島小Pの渡隆男部長は「過去最高の三位を目指して出場しましたが、それを超える成績を挙げられたことが何より嬉しいです。大会の三カ月前から初心者の人を入れて週に二〜三回、池島小学校の講堂で、ヘアの相性を見極めを重点に練習しました。ぎりぎりの人数の中、全員が心一つに頑張ったことが準優勝の原動力です。決定したヘアでの練習をもっと少し積めば、さらに良かったかなと思っています。来年に向けての課題は、まず新しい部員を増やすこと、そして一人ひとりのレベルアップです。初心者も含めて一丸で練習を積み重ね、来年こそは初の優勝を果たしたいと思っています」と話していました。

◆悔しさバネに来年こそ優勝

なつみ

二位だった港南中Pの小松年スリーダーは『今年こそは優勝！』という目標を持って出場しましたが、逆に去年より順位が下がり、正直ちょっと悔しい思いがあります。が、何とか三位に食い込めたのは、普段からみんなで重ねてきた練習のたまものです。特に一カ月はど前が

↑3位にもさわやかな表情の港南中Pチーム



らは大会を意識し、港南中で七〜八回、選手同士が互いに特徴を把握し合うことを重点に練習しました。その上で反響品があると思えば、リーダーである私の力不足でしょう。来年に向けては、今年の成績をバネに、『優勝』の二文字しか頭にありません。ハイ」と話していました。

スポーツ短信

●大阪・港ボーイズ(少年硬式野球) 十一月は高石大会に参加。初戦は満塁本塁打などで六回コールド勝ち。二回戦は本塁打を放つも惜敗。一年生は西成ボーイズとの合同チームで西淀大会に出場。初戦、一回戦と大差で勝利。三回戦で敗退。週末は練習試合で実戦感覚を養つ。硬式に興味ある小・中学生への入部説明・体験練習随時。☎六五七一・六七五三スポーツさんわ又は☎〇九〇・八三八五・四八・五番西。

ライブ情報

●市岡元町在住の音楽ユニット「花☆キャラ」ポップスから沖縄民謡まで生活に根ざした明る



→花☆キャラの演奏風景

く前向きで分かりやすいオリジナルソング▽CD『マルゲリータとトマトパスタ』『あなたらしくあたらしく』▽十一月二十四日火神戸ハッピーローラ(☎〇七八・二六二・九六七一)で「沖縄ナイト」出演予定▽<http://www.goon.ne.jp/shanna2383>

演劇ガイド

●あながいおまる一座スタジオ公演 夢の三部作「一挙上演」! 物語りには続きがあった! 交通事故や自然災害などを題材にした三つの物語『緒方さんの失敗』『折れた翼』『村は消えた』を通じて、中年男、若い男、若い女の人生が

つながり、絡み合っていく。中村路子原作・脚本。あながいおまる演出。出演はヨッシー原本、浜木克行ほか。一月二十五日(土)、二十八日(日)に各三回(計九回)公演。料金・上演スケジュールなどの詳細問い合わせは申込み会場の石炭倉庫(波除ハ・五・一ハ、JR弁天町駅から国道四三号を北へ直進、安治川堤防突き当たり右へ)。☎六五八一・〇六六四へ。

●いづもOH-笑い塾『弁天喜劇でサントも一

緒にいい湯だな〜」大阪出身の放送作家・

砂川一茂さんが「人を笑わせ自分も元気に」喜劇はチームワークとコミュニケーションやで」と子供たちを優しく楽しく「お笑い特訓」した成果を発表。「銭湯をなくすな」をテーマに繰り広げられる笑いと涙とファンタジーの人情喜劇。十一月二十三日(月祝) 十三時半と十五時の二回、築港温泉(築港一・九・三、地下鉄大阪港駅⑥出口から大阪船員保険病院の南東裏へ約一五〇m)で。入場無料。各回先着三十名。要予約。予約・問い合わせは主催の弁天町市民学習センター(☎六五七七・一四二〇)へ。

駐車場 月18,900円

- ★24時間入出庫可
- ★屋内につき安心
- ★敷金なしでも可
- ★車庫証明発行可

ミドルーフ車
車庫高さ1.85m

カービレッツ216
港区磯路2丁目1-4
＜営業＞AM8時～PM8時
☎6577-8731

中央大通り
43号線
みなと通り
港郵便局

(朝潮橋方面)
大和医療
ゆめふる
オリエント
市岡中
みなと通り

港区民の手記をもとに、地元在住の作家・青木健一さんがつづいた当地下ノマ。区内の地名や人名が登場しますが、総じてフィクションです。第三作は、昭和五十年代のみなと通と小川病院（市岡）を舞台に、孤独な若者と明るい女性の出会いを描く温かなラブ・ストーリー。

みなと通の灯（下）

（前号まで）六十一歳の塾経営者・四宮裕一

は、今もみなと通を通るたびに胸が熱くなる。三十数年前、西成区の「あいりん地区」で暮らしていた二十四歳の裕一は土方仕事で骨折し、市岡の小川病院に入院。遅れて入院した同い年の竹原哲夫の影響で、それまで孤立的な生き方をしていた裕一にも人間好きの心が芽生え始めていた。哲夫の見舞いに来る妹・悦子も人間好きな明るい性格で、しかも独特の「重み」を持っていた。絵のサークルの会員である彼女の勧めで重話の挿絵を描いたことから、裕一は急速に彼女の人間性に惹かれていった。が、自分の

不安定な仕事や性格から愛を告白する自信を持ってないまま、また彼女の気持ちも分からないまま、退院の期日は迫っていた。だがいつか、お互いの気持ちを分かち合える日が来たら――

四月二十五日。その日は同室の伊藤という患者が退院する前の日だった。伊藤は口雇いの建設仕事中の怪我で裕一より少し前から入院していた五十絡みの武骨で酒好きな男性だった。哲夫が加わって以来の病室の家族的雰囲気の中で、皆でこの日の夜に彼の退院祝いをやること話合っていた。

だが夕方、悦子がやって来た時には、哲夫も含めてほとんどの者が外出し、何の準備もできていなかった。といつより、恐らく近くの居酒屋へでも繰り出すつもりだったのだろう。裕一は、保田君やタッチャんら子供も参加できるように、ささやかでも手作りの宴を病室で張る方が心がこもると考え、悦子に持ちかけた。「何が料理作られへんやろか」「そろそろええわ、四宮さん」。予想されたとはいえ、気持ちよほど率直な賛同だった。それにしても裕一には、自分こんな人間的な、温かみのある行動をとれることが

不思議だった。哲夫と悦子の兄妹の影響として考えられなかった。

さっそく二人は近くの繁栄商店街へ買い出しに出かけた。このころには裕一は松葉杖を必ずしも必要としなくなっており、石膏も外されていた。それでも骨折した左足の指にあまり力が加わらないよう庇いながら、びっこを引き引きぬつくりと歩いた。悦子も裕一の歩調に合わせてくれた。宵の賑わいの中で、パジャマ姿の裕一は夢見心地だった。悦子は急な裕一の申し出にも慌てず、よく頭を働かせて、手際よく野菜や魚を買った。そして病院に戻って、カレイの唐揚げと芋サラダを作った。狭い炊事場で忙しく手を動かす彼女のすぐ後ろで、裕一はあれこれと手伝いながら、もう絶対彼女を離さない、と思っていた。ずっと胸がどきどきしていた。



退院祝いには伊藤を囲み、子供一人や彼女も加わって大いに盛り上がった。伊藤は「こんなにしてもろたん：生まれて初めてや」と、アルコールのせいだけでなく、顔と目を赤くして喜んでいた（もちろんアルコールは病院内で御法度だったが、当時の小川病院の「大らかさ」この病室の家族的雰囲気それが可能にしたのだ）。裕一は協力してくれた悦子に感謝したい気持ちで一杯だった。

宴が跳ねて後片付けをしたら午後九時半を回っていた。裕一は悦子に「送るわ」と声を掛け、二人で玄関口まで出た。この時間、ほかには誰もいなかった。伊藤の全快を喜ぶ皆の気持ちがこもった心温まる宴会だったことや、少しお酒が入っていたこともあって、悦子はのぼせたように顔を赤くしていた。

ただ裕一は、宴会中に谷川という患者が、二人のことを盛んに冷やかしていたのを気にしていた。谷川はやがて締めめの喧嘩で腕と足を折られて入室した二十代の男性で、気は短いがとても情の濃い氣質を持っていた。華やかな感じのする夫人と「歳くらいの女の子がよく見舞い



に来ていた。彼は「四宮さんと竹原さんの妹さんは絶対合ってる。ワシはたいがい悪いことをして嫁はんにも苦労かけてきたけど、人を見る目は確かや」と、酒が入った分、それまでより自信たっぷりの調子で繰り返したのだった。

裕一は室内用のスリッパを外出用のサンダルに履き替えながら、「谷川さんが俺らのことをえらい言っただけで、気にせんときや」と声をかけた。そして、少し声を落として「俺はそのつもりでも…」と付け加えた。すると、少し

離れた所で運動靴の紐を結んでいた悦子は、俯いたまま言った。「ええもん、気にしてないよ。私……四宮さんが好きやもん」。とき々と心臓が飛び出したかと裕一は思った。耳を疑った。が、確かに彼女は自分を好きだと言ってくれたのだ。その横顔は髪の毛で隠れていたが、その髪を通して、思い詰めた末の決心のような熱が伝わってきた。裕一はもう、嬉しさでどうしてよいかわからないほどだった。

病院から彼女の家に近い地下鉄朝潮橋駅前で約一キロあった。裕一は距離を考え、この時は松葉杖を使った。みなと通の南側歩道を並んでゆつくと歩きながら、二人は出会ってからの気持ちの移り変わりなどを語り合った。悦子は「私が四宮さんを好きになったら、四宮さんのええとこが伸ばしてあげられへんような気がして、ほかのもっとええ女の人を探してあげよと思つた」と言った。自分のような男のことをまで大事に思ってくれていたのかと彼女の優しさに裕一は涙が零れそつになった。そして裕一も、「俺も悦ちゃん（と彼はこの時から呼びようになった）に好きや言つて資格があ

るんかどうか迷って、自信が持たれへんかったんや」と打ち明け、それでも彼女を好きな気持ちをはネにしてこれから自分を強くしていきたい、という意味のことを言った。

午後十時を回って、広いみなと通を行き交う車は疎らだった。歩道にはほとんど人気がなかった。俯き加減に歩く悦子の横顔をときおり車のライトが照らした。やはりおかつぱの髪の毛に隠れて表情はよく読み取れないものの、どうやら彼女は涙ぐんでいるようだった。微かに鼻をすすり上げる音が聞こえた。

駅前で悦子はバツと顔を上げ、「ここであえわ四宮さん」と言った。駅の出口の明かりに包まれて、その類は一層紅潮して見えた。微笑みながら裕一をまつすべに見上げるその瞳は潤んで、少し恥ずかしそうだった。こんな可愛さがこの世界にあったのか、と裕一は思った。「忘れへんからー」「——そう叫ぶように言っていて悦子は駅前から続く国際見本市会場の敷地（当時）へ入って行った。街灯もない、この暗い広場を横切った所が彼女の家だった。ジーパンに肩掛け鞆の後ろ姿が小さくなっていった。途中で「

度振り向いて手を振った。おかつぱの髪が柔らかそうに揺れた。裕一も手を振った。

みなと通を引き返しなから、裕一は悦子の言葉をかみしめていた。「忘れへんから」——。一九七六年四月二十五日。裕一にとってもこの日は、生涯忘れることのできない日となった。

あれから三十七年が過ぎた。その間に、ほぼ一年の交際期間を経ての結婚があり、一男二女の誕生があり、何度かの引越しの後、悦子の父母の老後を見るため、二十数年前に港区へ戻って来た。その両親も既に他界した。そして五年前、悦子は子宮癌のため五十四歳であの世へ旅立った。悦子の実家を改造し、二人で近所の小学生を相手に続けてきたささやかな学習塾も今は裕一だけで営んでいる。長男は教師になっ



て千葉県の中学校へ赴任し、長女は和歌山県の建築技師に、次女は池田市の会社員に嫁いだ。

午後四時、その地理的位置と言葉の響きの温かさから二人で「安治川字級」と名付けた字びの場に、今日も子供たちがやって来た。土置ほどの板敷の教室には大きな古い黒板が掛かり、世界地図と日本地図が貼られている。生徒はいわゆる「できない子」がほとんどだが、特に時間を区切ることなく、教科書を中心に一人ひとり丁寧に教えてやるやり方が評判を呼び、生徒が途切れることはない。わずかな月謝を払えない家庭の子もいるが、催促はしない。代わりにその子らの親は時々、米や野菜や魚を差し入れてくれる。その気持ちに裕一は嬉しい。「ここはそんな土地なのだ。」「食べていけたらええ。喜んでもらえたらええ。子供らと一緒に過ごせたらええ」と裕一は思っている。

「悦子との出会いは、みなと通の灯は、間違いない。俺を変えてくれた。内へ、自分へと向いていた生き方を、人へ、地域へ、子供たちへと——。」

(おわり)

日本料理の美伝えたい

なにわの名工若葉賞 葛尾 雄さん

優秀な青年技能者を府が表彰する本年度の「大阪府青年優秀技能者表彰」（なにわの名工若葉賞）に、港区から築港の日本料理人・葛尾雄さん（ふしお）が選ばれました。各職業分野で「一級技能士以上の技能を有する」などの条件を満たした満二十五歳未満の二十二人のうちの



「高い技術や姿勢が評価され」「なにわの名工若葉賞」に選ばれた若き日本料理人・葛尾雄さん（築港4丁目の「割烹むろ多」の調理場で）

一人。十一月十八日にホテル大阪ベイタワー（弁天）で開かれた「大阪府職業能力開発促進大会」で表彰が行なわれました。

葛尾さんは築港四丁目の日本料理店「割烹むろ多」で働く若手調理職人。①「桂剥き包丁」に関して極めて優秀な技能を有している②本来おでんや煮物にする「ひろつす」を揚げ物としての料理に仕上げた③普通十年以上かかる揚げ物技術の習得を四く五年で果たし若手料理人の模範となった一などが評価されました。

葛尾さんを職場に訪ね、受賞の感想や、受賞に繋がった技術について訊きました。

◆吹田市から専門学校へ

葛尾さんは一九八七年五月、大阪府吹田市で、小学校教師の父母のもと、二人兄弟の二男として生まれました。地元の小・中学校から公立高校を経て阿倍野の辻調理師専門学校で二年間、料理の基本を習得。卒業して「むろ多」に就職し、店の寮で単身生活をしながら修業を続け、現在は大阪府日本調理技能士会の青年部員として業界発展のためにも活動しています。

◆技能五輪へ猛練習

転機になったのは店に入って五年目、二十三歳での技能オリンピック出場でした。店の主人である室田大祐さん（昨年度「なにわの名工」）本紙二四頁で紹介しや大祐さんの妻で女将の栄子さん、さらには先輩たちから「やってみ」と勧められ、不安もありましたが、思い切って挑戦しました。

「技能五輪全国大会」は二〇一〇年秋の二日間（注）に亘って横浜市で開催されましたが、日本料理部門には百人前後が出場、二十数人ずつの四グループに分かれて技を競いました。課題は、①れんご鯛の姿造り（五十分）②鱧の八幡巻（五十分）③大和芋を使ったたずな寿司（九十分）の三種目。全国の若手精鋭が一堂に会しての一発勝負の緊張の中、結果的に上位入賞は成りませんでした。出場に向けての猛練習は「そのあと色々な面で役立った」といいます。

◆「桂剥き包丁」に優れた技能

今回の受賞にはそつした出場歴も物を言いましたが、その選考過程では、何より葛尾さんの持つ技術そのものに関心が集まりました。特に「桂剥き包丁」には優れた技能を持ち、中でも

大根の「けん」の桂剥きでは、直径約十センチの大根を、新聞紙の文字を透かして判読できるほど均等に薄く剥くことができ、しかも普通は十数分かかる工程を五分ほどで終えるスピード感も併せ持ち、並居の選考委員を唖然させたといいます。そしてこの「薄く、速く」と、技能五輪への血の滲むような集中練習で我が物にした技術だったのです。

◆「つるつる」を揚げ物に

もう一つ、選考委員の目を惹いたのは「揚げ物」の技術でした。一般の料理人が習得に十年以上かかると思われる技能を、わずか四〜五年でマスターした上、その技能を生かして、本来はおでんや煮物として供される「つるつる」を、揚げ物へとアレンジしたのです。

「シャキッとした食感がたまらない」「揚げ立てに出汁をかけて食べると最高」と多くはあつかり店の人気メニューの一つになったこの「揚げつるつる」。店の方針で、若手に調理練習の機会が豊富に与えられる中、「こつこつしたらもっとおいしいくなるのでは…」と試行錯誤を重ねていくうち、「一年前の春ごろ閃いた」そうです。そ

←後輩と談笑する葛尾雄さん(左)。職場での意思の疎通は、優れた料理に欠かせない要素だ



して、そのポイントとして掴んだのは、油の温度加減。「高過ぎても低過ぎてもカッパツと揚がらず、シャキッとした食感が生まれません」。

◆緊張の中に喜ぶも

職場では八年目といつとて、先輩と後輩に囲まれて料理人生を歩む葛尾さん。日々の仕事は、朝九時までに北新地店(北区)へ店の車で送つてもう一つに始まり、仕込み、ランチ営業、夜の営業をこなし、洗い物や片付けを終え、

二十二時ごろ桑港店で遅い夕食をとることで終わります。

そんな日常生活の中、気になるのはやはりお客さんの反応です。幸い北新地店はカウンターと調理スペースがフラット(平ら)なので、調理しながら客席の反応がよく分かり、「その分当然緊張感もありますが、おいしくつくり、楽しくつくり食べておられる様子を見ると、料理を提供した者として本当に嬉しくなります」。

その一方で、この業界に付き物の、年末年始や行楽シーズンの忙しさは、人気店だけに尋常でなく、特に昨春から店に任されるようになってきた大相撲大阪場所の仕出しの期間は、睡眠時間もともに取れないほど。「体力的にかなりきつい」と感じています。そんな厳しさも「真の料理人へのステップの一つ」と捉えています。

◆日本料理の魅力と怖さ

小さい頃から「形ある物を作るのが好きだった」こともあって、高卒後、迷わず料理学校へ進んだ葛尾さんですが、日本・中華・西洋と三種類ある中で日本料理を選んだのは、「自分が日本人だから」、そして「日本料理が一番おいしく

美しいと思ったから」といいます。

そうして店に入ってから本格的に関わるようになった日本料理ですが、今ではその魅力にまします魅せられています。その要素として葛尾さんが特に挙げるのは「季節感があり、目でも楽しめる」といふ。素材はもちろん、その器や盛り付けまで季節に応じて変化させる繊細さは他国の料理には見られない特徴。それを自らの手で演出し、お客さんにも感じてもらいたいという日本料理人としての上ない喜びを感じるといいます。

その一方で、そうした繊細さを持つ日本料理には、火加減ひとつにも細心の目配り、気配りが必要で、全ての調理過程を通じて僅かな手抜きも許されないと常に、逆に「怖さや難しさも感じる」といいます。

とはいえ、そうした魅力も怖さも合わせて、「日本料理は最高!」と断言する葛尾さん。「健康にも和食が一番優れている」とことが科学的にも証明されつつある現在、その分野に最前線で関われる喜びが、葛尾さんの口ぶりに表わられています。

◆めざす料理人像

このように、自ら選んだ道を進む途上で受け取った「なにわの名工 若菜賞」ですが、どう受け止めているのでしょうか。

「八年間の頑張りが形になったことが何より嬉しかったです。技能五輪出場や調理技術もちろんだ受賞理由になったと思いますが、大阪の食文化発展に尽くしてこられた店の主人の活動に助手として同行させて頂く中で、勉強したり教えたりしてきたことも評価されたのではないのでしょうか。これまで導いて下さった店の方すべてに、また応援して下さい下さった業界の方々に、そして両親にも感謝しています。今後は賞の名に恥じないよう、賞の値打ちに見合うよう、また後輩たちの見本になるよう、とりあえずは目の前の一つ一つの仕事をきっちりこなしながらレベルアップを図っていきたいと思っています。そしてゆくゆくは、主人を超えるぐらいの料理人になれたらと思っています」。

そう語ったあと、調理場で後輩と談笑する葛尾優さん。誠実で控えめな態度、そして強い意志を感じさせるまっすぐな口元が印象的な好青年でした。

年でした。

お知らせ 今回のインタビューした葛尾優さんが働く「割烹むろも」では毎年の「技能五輪全国大会」に従業員を送り出していますが、十一月に行なわれた今年度の大会（第五十一回）では仲川和馬さん（ミミ）が見事「金メダル」に輝きました。港区の料理界では初の快挙。また日本料理部門では世界大会（隔年）が開催されないため、若手日本料理人として仲川さんが事実上の「世界一」となりました。この喜ばしいニュースについては、一月号以降で仲川さんのインタビュー記事を掲載する予定です。



をす 史週 自分て過 綴って良 良き余生!

お話をききとり、冊子
にしてお渡しします。

大学から都市銀行に就職しましたが、職場の人間関係からうつ病に陥り、休職と復帰を繰り返した場
旬に40歳で退職。以後は京都で喫茶店を営み、結婚もせず、山登りを趣味に生きてきました。そんな人生の意味を問い直したく、聞き取りをお願いしました。(60代男性)

★文書全般の代筆も承ります★

400字(原稿用紙1枚)で
千円が標準料金です。

港新聞・飯田編集事務所 ☎6571-4636

入魂の手技にため息

老人福祉センターで作品展



→魂を込めた力作の数々に「綺麗やね」「上手やわ」とため息がもれた「港区老人福祉センター作品展示会」(写真はアイデア手芸コーナー)

「美しいね」「見事やわ」。港区老人福祉センター(分館)の「作品展示会」が十一月十二・十三日に同センターで催され、入魂の手技の数々にため息がもれました。

展示されたのは墨絵、生け花、習字、手芸、折り紙、編み物、俳句、フラワーアレンジメントなど、この一年間に同センターの各文化教室・同好会で制作された「百点超」。どの作品にも作者の想いが籠り、持てる技が注がれ、二つとない個性に溢れていました。

◆淡色で暖かなセーター

このうち「編物教室」コーナーでは、様々な種類の毛糸や編み方を駆使したセーター・帽子・手袋・マフラーなど「千数点」が展示され、鑑賞者から「暖かそつやね」「綺麗ね」「根気やね」などの声が聞かれました。会場にいた生徒の藤原順子さん(池島)「入会二三年」は色とりどりの淡色系の毛糸で編み上げたセーターを、中野禮子さん(池島)「昨年七月入会」は菱形模様を整然と敷き詰めた赤紫色のセーターをそれぞれ出品。「編み物は若い頃から親しんできましたが、一番の楽しみは、自分のイメージをもとに、み

んなと相談しながら創り上げていくことです」「自分で着たり、人にあげたりして、作品がずっと残るのも魅力です」「出来上がった作品を誉めて頂くと、とても嬉しくなります」などと話していました。

◆和洋が溶け合った生け花

また「生花教室」コーナーでは色とりどりの花・葉・枝や様々な活け方を駆使した千数点を展示。このうち前田禮子さんの作品には実付き南天・カサブランカリリー・ピンポンマム・旭葉蘭が使われ、鑑賞者から「和と洋が見事に溶

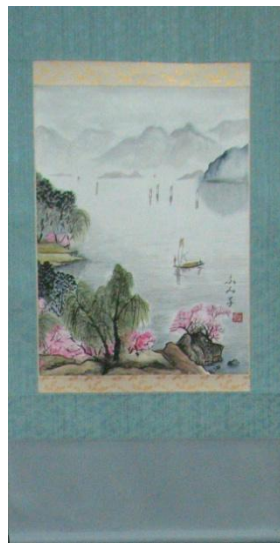


→淡色の毛糸に暖かさが感じられた編物教室・藤原順子さんのセーター(①)左と、実付き南天やカサブランカリリーなど和洋を溶け合わせた生花教室・前田禮子さんの作品(②右)

け合ってるね」などの感想が、また川勝允恵さんの作品にはじだれ桑・ベコリアハンギング・キングプロテア・アセビが使われ、コーシヤスな感じやね」などの声が聞かれました。

◆心落ち着く「墨絵や習字」

また「墨絵同好会」コーナーでは墨と水を巧みに用いた風景画・人物画など大小十数点を展示。このうち藤原ふみ子さんの「山水」には「風雅やね」「心が落ち着くね」「奥行きが感じら



→「風雅やね」「心が落ち着くね」と絶賛の声が聞かれた墨絵同好会・藤原ふみ子さんの「山水」
⑥と、枯れた趣と読み・意味の添付が好評だった土井美佐子講師の書「門外可設雀羅」⑤

れるね」「墨の中の淡いピンクや緑が効いてるね」などの声が上がっていました。

また「習字勉強会」コーナーでは楷書・行書・草書など様々な書体による四字熟語など三十数点を展示。このうち大政喜久子さんによる「刻舟求剣」は筆遣いに勢いを感じられ、「旧習を固く守って融通のきかない」とこの意味が添えてありました。また土井美佐子講師による「門外可設雀羅」は枯れた趣が印象的で、「モンガイジャクワラモウバシ」との読み方と共に訪ねる人もなく門前がひっそりとしている。人が来ないので門の前に雀を捕る網を張る「とがづな」という意味が書き添えられ、「なるほど」とつなぐ人が見られました。

◆秋らしい俳句やアイディア手芸も

また「俳句同好会」コーナーでは例会などで詠まれた十四点を掲示。このうち山田勝彦さんによる「亀泣くを信じて吾娘の納骨す」には「亡くなった娘さんへの愛情が感じられるね」などの感想が、宮本登喜子さんによる「恋多き業平寺に秋を訪ふ」には「色んな女性と浮き名を流した昔の歌人縁のお寺に秋を感じてはるんや

「窓があるだけで奥行きを感じるね」と好評だったアイディア手芸教室・吉田文子さんの作品
⑤と、細かな作業に感嘆の声が上がった柴田又男さんの「ダイヤモンド柄の小物入れ」⑥



ね」などの感想が聞かれました。

このほか、「港のりづる」云々「フラワーアレンジメント」「アイディア手芸」などのコーナーにも合わせて百点超が展示。十点超の出品をした吉田文子さんによる壁掛けや置き物など、工夫と遊び心を散りばめた作品の数々に「面白いわ」「よつこんな細かいつづができるね」「窓があるだけで奥行きが感じられるね」などの声が聞かれました。また柴田又男さんの「ダイヤモンド柄の小物入れ」や和田津五郎さんの「折り紙ベビーシューズ」には、男性作品には珍しい細やかさと可愛らしさが感じられました。

楽しみながら表現力育む

キッズ・クラフト&ペインティング展



→「キッズ・クラフト&ペインティング展」の絵

画作品を案内する川島昌代さんと娘の樹林ちゃん
11月17日、ガレリア・リバリアで

「子供たちが楽しみながら表現力や想像力を育てられるように」と開かれている「キッズ・クラフト&ペインティング」の作品展が十二月中旬に三先の画廊&アトリエ「ガレリア・リバリア」で開催され、にぎわいました。

展示されたのは同教室に通つて十二歳の子供たち十数人による絵画やクラフト作品。このうち絵画は水彩画やペン画など六十数点。この中で、クレパスと水彩絵具を使った片山龍音くん七歳の絵は、玉入れに熱中する友達の様子が豊かな表情や躍動感溢れる動きで表現され、鋭い観察力が感じられました。またクラフト作品は木工・紙粘土・染色・織物など計五十数点。こ



→クレパスと水彩絵具で運動会を表現した男児の絵画(上)と、友達を描いた女兒のペン画(下)

←恐竜や虫を表わした男児の紙粘土作品(上)と、絞り染めの上に自由に絵を描き加えた作品(下)



の中で、虫を表わした片岡俊輔くん(八歳)の紙粘土作品は、様々な色を散りばめた背中や針金の足に表現力の豊かさを感じられました。

義母で画家の川島恵美子さんからこの教室を引き継いで十八年になるという講師の川島昌代さん(成安造形短期大学卒)は「年齢も個性も違う子供たちが自由な発意の中で刺激し合いながら表現力や想像力を育めるよう、例えば木工では、桜材の無垢な(むく)でできるだけ本物の素材を使うことを心がけています」と話していました。

キッズ・クラフト&イングリッシュ教室 港近

隣センター(八幡屋一・四・二〇)で月三回、有料で開催。☎〇八〇・四四九五・六八八三川島。

人生は虚構か真実か

あんがいおまる一座『男三人』に反響



→ 中年男性3人の会話を通じて人の心の不思議さを浮き上がらせた『男三人』の一場面。11月、波除のフリースペース石炭倉庫で

人生は虚構か真実か。中年男性三人の会話を通じて人の心の不思議さを浮き上がらせた『男三人 トライアングル』が十一月、波除のフリースペース石炭倉庫で上演され反響を呼びました。石炭倉庫を拠点に庶民の生活感情や社会的メッセージを込めた演劇を世に問い続けるあんがいおまる一座のスタジオ公演。一昨年亡くなった座付き作家・綾羽一紀さん(日本ペンクラブ会員)の原作をあんがいおまる座長が脚色・演出。ヨッシー原本さんらの個性的な演技とマーラーの交響曲が舞台を飾りました。

◆一人の女性を巡る疑心暗鬼

——太宰卒業から三十八年。毎年の同窓会の後で会つのを慣わしにする男三人が喫茶店で話している。美しい妻・潤子(うづこ)を亡くしたばかりの薫(かおる)が、毒帝(どくてい)の鏡介(けいけい)と独身の睦夫(むつふ)に「妻の間の間から出てきた手紙」を読み始める。一通は米国(みこく)アイダ木(き)から、もう一通は中国(ちゅうごく)杭州(こうしゅう)から、どちらも潤子に「愛をこめて」とある。イーシヤルや筆跡から、また最近アイダ木や杭州へ旅したこと、差出人として鏡介と睦夫が疑われる。さらに読み上げられた「妻の日記」には「私の

悲しみの全てを知ってほしい」とあった。果たして潤子(うづこ)の密かな愛の対象は誰だったのか。「結局、人の心なんか分からない」と薫。「誰も心の中を見せることはない」と睦夫。「深い深い心の底を見たい」と鏡介。三様の回想(さかづき)思いが交錯(かかく)する中、「そろそろ時間だ」「良い時間だった」「来年はどんな物語を」「今度は君の番だ」。やがて三人が別れた後に登場した潤子は語る。「日常生活では誰もが舞台の虚構以上に演技をしているのかも。あの一通は私の願望(がんぼう)から、一人に現地(げんち)から出してもらった。人生(じんせい)まず楽しむこと。楽しむことこそ悟り(さと)。そして抱き合った相手は、喫茶店のウェイターだった——」。

◆人の心の不思議さ、面白

どこまでが本(ほん)当(とう)でどこまでが嘘(うそ)なのか。綾羽(あや)さん得意(えい)の幻想(げんそう)的な展開(てんか)から、人の心の複雑(くわんざん)さ、不思議さ、面白さが浮かび上がる。同時に、競争(きさう)や孤立(こりつ)の中で真実(しんじつ)を共有(きやうゆう)できない現代(げんたい)社会(しゃかい)の在(あ)り様(よう)にも想(おも)いを向けさせられた舞台(ぶたい)でした。観劇(かんげき)後の感想(こうさう)文(ぶん)には「静(しず)かで深い味わいがあった」「マーラーの交響曲(きやうぎく)がマッチしていた」などありました。

雨の中に響く歌声

天保山まつりで花☆キャラなど



→本降りの雨の中で爽やかな歌声を響かせた花☆キャラのニッシー⑤とカオリン⑥11月10日午後 海岸通の赤レンガ倉庫前広場で

雨の中に爽やかな歌声が響き渡りました。

十一月十日に築港一帯で開催された「第8回天保山まつり」(築港・天保山にぎわいまちづくり実行委員会主催)は雨をうけて各会場で様々な催しが行なわれましたが、そのうち海岸通の赤レンガ倉庫前広場では恒例の音楽ライブが催され、地元港区の「花☆キャラ」など何組ものミュージシャンが個性的な演奏を披露しました。

♪息の合った夫婦のハーモニー

このうち花☆キャラは市岡元町で暮らし大正区で働く二十三歳差の夫婦ユニット。心のパンになる音楽をめざし、反戦平和、沖縄、震災、原発などの社会問題にも関わりながら、現実への「憤」や庶民への応援などのメッセージを含んだ分かりやすい歌詞と美しい旋律でファンを拡大しています。この日は何気ない日常の幸せをかみしめる自作「マルグリータとトマトパスタ」や美しい沖縄の自然と心を歌った沖縄民謡「月桃」など計四曲を披露。ニッシーと西野成治さんの伸びやかで力強い男声、カオリンと西野香さんの爽やかで愛らしい女声、夫婦ならではの息の合ったハーモニー、ハイテ

「音楽ライブで演奏する「フワフワハット」④と、

文楽の口上で「出帆」する「菱垣廻船模型」⑤



クニツクのギターや口笛の伴奏が心地よく、合間に挟む朗らかなトークは、本降りの中で耳を澄ます聴衆の心を和ませていました。

♪菱垣廻船やデュアスロンも登場

ライブではほかに、築港の日本パナユーズ㈱に勤務する壮年フォーク歌手「J.P.U.F.」さん(本名・藤田勝己さん)や、若手女性シンガーを中心とする「ユニット「フワフワハット」」なども登場。また同広場ではみなデュアスロン(フワフワハット)と自転車持久力と速さを競つ「デュアスロン」の緩やかバージョンや「菱垣廻船(江戸時代の木造輸送船)の縮小模型の展示・パレード」などが行なわれ、関心を集めていました。

平和のため

戦争体験

語り継ごう

今月の語り部

猪伏 昌二さん（元田中佳良）⑧



前まで 昭和四（一九五九）年、北朝鮮の元山に生まれた私は、中国大陆での戦火を背景に満州（中国東北部）東部の町・図們、次いで延吉で育った。対米英戦が始まり、戦争一色の中学校生活を送った。昭和二十年八月、突如

のソ連参戦に緊張が走る中で敗戦。日本人街は廃墟と化し、避難生活は悲惨を極めた。その中で遭遇した満蒙开拓青少年義勇軍の悲劇は同世代として胸張り裂ける思いだった。発疹チフスで父を失い、豆腐売りや風呂屋の三助などしながら家族を支えた。昭和二十一年三月、母と共に父の遺体を見に行ったが、日本人墓地は凄惨だった。人民裁判では親日的な中国人が処刑された。ソ連引き揚げ後の捕虜収容所跡には日本兵数十人の遺体が埋められていた。やがて夏になり、帰国の噂が流れた。（本文は回想録『平和の空よ 永遠に』から本紙が抜粋・再構成）

遂に引き揚げの日が

送別会など民族越えた人情に胸熱く

梅雨のない大陸では六月から八月までの全期間が夏です。花は咲き乱れ、作物はこの時ばかり生育の歩を速めていました。そして、そうした季節の変化と競つかのよつに、引き揚げの噂の真実味も日に日に強まり、「異国でのこの苦しみから問もなく逃れられる」夢にまで見た

故国日本の土を踏める」という期待に誰もが胸を膨らませていきました。

◆お骨にする商売

そんな時期になって、日本人の間では急に新しい商売が始まりました。それは、越冬中に亡くなった人たちを火葬してお骨にしてあげるというもの。親族を亡くした家にはしきりに勧誘がありました。亡くなったのは二万人とも三万人ともいわれたので、随分といい商売になったのでしょつ。

しかし我が家では「もつ土に還っているのに、今さら掘り返して焼くのは…」家族も多いので、食べることが第一。無理をすることはないと話し合い、父の遺体は埋めたまま帰国することに決めました。それに、東本願寺の庭に積まれた遺骨の衝撃的な光景（八月で既述）を見ていた私としては、大陸で永遠の眠りについで、そしてこの土になることが、本人にとって最高の成仏になると信じていました。

◆真心こもる送別の宴

そんな頃、鉄工所や風呂屋で働いていた時の金社長が私の帰国を聞きつけ、送別会を開いて

くれました。大きな池の近くにある二戸建ての閑静な屋敷が社長宅で、そこへ数人の人たちと一緒に招待されたのです。

猫足の会席膳が一人ずつ用意され、初めて見る高価な食器類に最高級の朝鮮料理が盛られました。真心にもなるもてなしに涙がこみ上げると共に、「果たして自分が金社長にどれだけの仕事をしてあげられただろうか…」と反省もさせられたものでした。

宴席では日本の状況にも話が及び、「今帰ると大変だ。何年かしてからでも遅くはないよ」と帰国を引き留めてくれたり、日本の食糧事情を心配して「高梁を育てるだけ持つて帰ると良い」と助言してくれました。

◆ブリキ屋の善意

一方、最後の勤め先であったブリキ屋では出発の三日前まで働いていましたが、出発前日、奥さんがポニーパンをたくさん作ってくれました。朝から鉄の大釜で湯を沸かし、玉蜀黍の粉を練ってかまぼこ型にし、それを釜に貼り付けて蒸したものでした。釜に付いた部分はほんがりと焦げ、何とも香ばしい味で上がった。帰る

の車中で食べて下さい」とのこと。家族七人の携帯食糧としてかなりの数をもらいました。

金社長という、ブリキ屋という、異国の人がちが示してくれた民族を越えた善意と人情に胸が熱くなるのを抑えることができませんでした。

◆駅前広場に集口

出発の指示が居留民団からあり、引き揚げはもはや現実となりました。私の家族はその第一陣と決まり、さっそく炊飯道具をはじめ、着替えや学校の成績表、それに金社長に言われた高梁やブリキ屋の奥さんからのポニーパンなどなど、一切の持てる物を風呂敷に包み、鞆やリュックにも入れて、皆で振り分けました。そして近所の人たちに送られ、八月十六日正午、延吉駅前の広場に集まったのです。

因みにこの時の荷物の一つである中学の卒業証書は、寺田佐平校長がこの年三月、四年生としては一日も出席できなかった私に対し「家のためによく頑張った」「日本で役立つこともあるだろう」とわざわざ家まで届けて下さったものでした。

◆憧れの同級生は無事だった

集合した人は数百人から千人近くいたように記憶しています。みな疲れ切ってはいても、心は日本の空に飛んでいたことでしょう。広場には、過酷な冬を生き延びて祖国日本に帰れるという喜びが溢れていました。

その中をよく見渡すと、中央前方に小学校時代の憧れの同級生・中島宗子さんの姿がありました。驚くと共に、「良き生き抜いてくれたものだ」と心が躍り、顔が火照っているのを覚えました。卒業後は一度も会っていませんでしたが、いい娘さんに成長していたと、そして何より無事であったことが嬉しく思われました。

◆無蓋貨車へ乗り込む

ともあれ、私たち第一陣は無蓋貨車へグループごとに乗り込みました。すぐには数え切れないほど長い車列でしたが、四十数両あったように記憶しています。

リュックサックや風呂敷包み、それに炊飯用の鍋や釜や薬缶を車両の端に積み上げて風を除け、子供や年寄りが転げ落ちないよう、大人が外側に、年寄りや子供は内側に座りました。全ての準備が整い、三角屋根の延吉駅を出発した

のは夕方近くでした。

◆まもなく吉林をめぐりつ

列車はまず吉林を目指して西へ走りました。が、数駅通過すると長時間停車するといった具合で、随分と時間がかかりました。「連軍が性能の良い機関車を持って行ったので、残っているのはオンボロばかり」といつのが実情のようでした。それでも明るく翌日の夜には、延吉から三十番目ぐらゐの駅「拉法駅」に到着しました。

翌朝八時頃、私たちは徒歩で吉林市に向けて

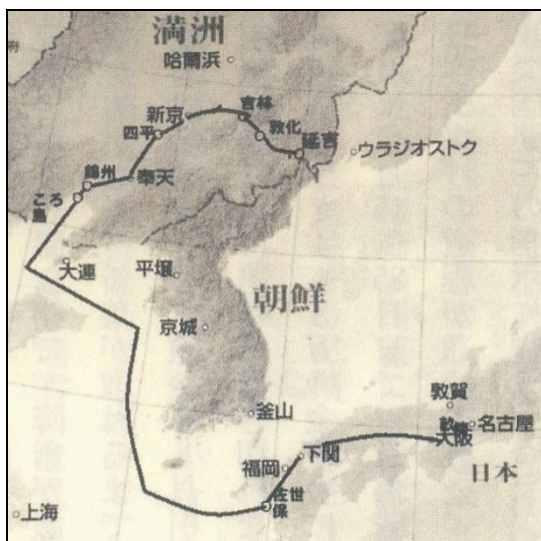
はらう

歩き始めました。隊列を組み、八路軍（中国共産党軍）の兵士が五、六人付き添いました。八月の日照りはきつへ、歩行中、水が尽きた時には、ボウフンが浮いている道端の水槽の水などを沸かして飲みました。背負った荷物に耐えられず道脇に投げ出す人もいました。かと思つと、その荷物を拾つてにやまする人も。また老人の荷物を代わりに背負つてあげ、兵隊上りの屈強な壮年も見かけました。

◆八路軍から国府軍へ引き渡され

やがて山岳地帯の登山道に差し掛かると、「停止」の命令が出されました。そこは八路軍の支

「延吉からの引き揚げルート（図は佐世保港に上陸するコース。私たちは博多港に上陸した



配地域と国民政府軍の支配地域の境界で、鉄条網の手前に八路軍、向こう側に国府軍の監視兵が数人ずつ立ち会ひ、引き揚げ者を一人ずつ引き渡す作業が行なわれました。その手続さば意外と簡単なものでしたが、そこを無事通り抜けた時、何ともいえない開放感が湧き上がったのを覚えています。

因みに、その翌日だった国府軍兵士の装備は、八路軍兵士のそれに比べて格段に先進的で、

「中国内戦は国府軍が勝ちをつた」と思ったものでした（実際の結果はその逆で、後にそれを知った時、戦闘の勝敗は装備の優劣ではなく、国を想つ思想の強弱・高低によると思ひ知らされたものです）。

◆思わぬハプニングが

そこからさらに登り坂を辿り、小姑家駅を経て老爺嶺駅に着いたのは午後三時頃でした。ラホフ

拉法駅から二十キほどの道のりでした。駅に近づいた時、国府軍兵士が拡声器を使い、「日本人引き揚げ者の皆さん。お疲れ様でした。ここが老爺嶺駅です。この駅から列車が出ますので、指示に従つて乗車下さい」と流暢な日本語で呼びかけてくれたのが印象に残っています。

そこから一行は再び無蓋貨車に乗りました。が、老爺嶺駅から六十キほどを走つた頃、松花江の河原の手前で停車してしまいました。京図線の鉄橋が真ん中で爆破され、機関車と貨物列車が頭から濁流へ突っ込んでいたのです。中国内乱の一つの姿でした。思わぬハプニングに、皆の顔を動揺が走りました。

ミニ文化案内

●交通科学博物館

①展示用模型蔵出し大公開展ⅡEF80形電気機関車(1/15)、チ300形貨車(1/5)など大きなサイズの鉄道模型を約二十点。十一月二十一日(土)～四月六日(日)に第八室で②さよなら企画展PartⅡ「52年の軌跡展Ⅱ同館が昭和二十七年に誕生し、閉館するまでの約五十年間に、移り変わる時代や交通体系の中でどんな活動をしてきたかを振り返る、最後の企画展。一月十一日(土)～四月六日(日)③保存車両大公開Ⅰ～Ⅱこちらはく乗り物大公開編Ⅱ閉館にあたり車両整備を終えた屋外展示場の車両や、普段公開することのな



→「52年の軌跡展」に展示予定の写真①と「よみがえるあの時代」から「降車専用停留所」②

かった実物車両などを公開。車両内部が見られる最後のイベント。公開されるのはEF52形電気機関車1号車、0系新幹線電車(先頭車グリーン車・ビューエ車)、スシ28形食堂車301号機、マロネフ59形寝台車1号機、80系電車(制御車)など。一月五日(日)～三月二十日(日)の日曜日及び三月三十一日(金祝・二十二日(土)・二十九日(土)の十時半～正午と十三時～十七時。公開日程は問い合わせを④関西大学

鉄道研究会写真展「よみがえるあの時代」Ⅱ阪和線・福知山線・大阪市電などの過去と現在を比較した約十点。十一月二十三日まで開催中▽十～十七時入館 月曜休館 祝日なら開館し翌火曜休、火曜も祝日なら振替休なし、春休みは開館。十一月二十九日～一月二日は年末年始休館。高校生以上四百円、四歳～中学生百円。JR弁天町駅すぐ。 ☎六五八一・五七七二。

●関西フィルハーモニー管弦楽団「華麗なる二ユーヤークンサート」

同楽団の首席指揮者・藤岡幸夫さんがクラシック&オーケストラのライブ感を伝える人気シリーズ「ミート・ザ・クラシック」の二十八回目。「村英仁との夢

げん 幻の世界」と題し、日本人初の「ユネスコ平和芸術家」で人気ヴァイオリニストの「村英仁」さんが名作「揚げひばり」「ツイゴイネルワイゼン」を高高らかに歌い上げると共に、シウトラウス・ファミリーのウィンナ・ワルツ&ポルカが新春を華やかに彩る。演奏曲目は、①アンダーソン

:: 舞踏会の美女②ヴォーン・ウィリアムズ:: 揚げひばり③サラサーテ:: ツィゴイネルワイゼン④ヨハン・シウトラウス:: 酒・女、歌⑤ヨハン・シウトラウス:: ヴィーンズ気質⑥ヨハン・シウトラウス:: 美しく青きドナウ ほか。一月十八日(土)十五時からいずみホール(JR大阪城公園駅、地下鉄OBP駅下車)で、一階席四千円、



→指揮を担当する関西フィル首席指揮者・藤岡幸夫さん(©SHINYAMAGISHI)

「ヴァイオリン独奏を担当する二村英仁さん」
 (©Naomi Kawakami)



一階席三千円、学生席 千円(十八歳以下、一階席のみ)。無料託児サービスあり(先着二十名、申込締切二月八日)。**〆六五七七・二三八一**。

●**港図書館** ①年末年始休館〓十二月二十八日

(土) から二月六日(月)まで。このうち二月五日(日)はコンピュータシステム入れ替えに伴う臨時休館。返却ポストは十二月二十八日(土)午後五時から二月四日(土)午前九時まで利用不可②図書展示「よつこ書物の森へ」展〓十二月十七日(火)まで開催中。大阪市立図書館司書〓一人が「書物の森」というテーマに沿って選んだお薦めの本を展示③図書展示「大阪を舞台にした小説」展〓一月七日(火)

から④あかちゃんのおたのしみ会〓毎月第一金曜日(一月は年末年始休館のため第一金曜日の十日)の十一時〓十一時半、じゅうたんコーナーで。赤ちゃんと保護者を対象に、赤ちゃんが絵本に親しめるよつ工夫。申込不要〓いずれも問い合わせは**〆六五七六・二三四六**港図書館へ。

●**いずみホール「モーツァルト〓未来へ飛翔する精神 克服〓ザルツブルク」5**「モーツァルトを旅する3年間」シリーズの一年目(全五回)の最終回。「室内楽はのびやかに」と題し、幅広いジャンルや楽器にむらなく名曲を遺したモーツァルトから、アンサンブルの妙を楽しめる室内楽を、ウィーンフィル・メンバーといずみシン

フォニエッタ大阪の二人の共演で贈る。曲目はモーツァルト：フルート四重奏曲第一番(長調k. 285、オーボエ四重奏曲へ長調k. 370、ディヴェルティメント(長調k. 334)。

出演者のうち古部賢一さんは港区池島出身(池島小、港中、大手前高卒。東京芸大在学中に新日本フィル首席奏者に就任。小澤征爾さんら多くの名匠から高い評価を受け、室内楽メンバーやソリストとしても活躍。バロック演奏でも高

「いずみホール「モーツァルト〓未来へ飛翔する精神 克服〓ザルツブルク」5に出演する港区出身(池島小、港中卒)の古部賢一さん



い評価。第十回^{いづみ}山出光音楽賞受賞。東京音楽大学、昭和音楽大学非常勤講師。いずみシンフォニエッタ大阪メンバー。一月十一日(土)十八時からいずみホール(JR大阪城公園駅歩五分、同「京橋駅」南口歩十五分、地下鉄「OBP駅」歩十分で。料金は一般八千円、学生三千円。**〆六八九四〓二一八八**同ホールチケットセンター。

●**リピーター山出光音楽賞コンサート** 温かくユーモラスなメッセージソングでおなじみのリピーター山さんが十二月二十三日(月祝)に恒例の年末コンサート。第一部は十二時半から『山の歌・愛の歌・心の歌』。第二部は十五時半からオリジ

「年忘れコンサート」に出演のリビート山崎さん



ナルアルバム発売記念『架空のアニソン歌手・Magumaバースデー・LIVE』。第二部は十七時半からパーティ『リビート山崎さん』。各回「三田組み合わせ劇」チケットあり。問い合わせ・申し込みは会場の石炭倉庫（波除ハ・五・一八、JR井大町駅から国道四三三を北へ直進、安治川堤防突き当たり右すぐ。☎六五八・一〇六八四・FAX六五八・一・二七〇）へ。

●井大町市民学習センター「クリスマスコンサート2013」 毎年好評の関西フィルメンバーによる弦楽五重奏クリスマスコンサート。今年は「懐かしのスクリーン・ミュージック」をテーマに、第一部は映画の中で使われたクラシックの名曲、第二部は多作『アービッド・ハウエル編

曲による映画音楽名曲特選。誰もが一度は耳にした珠玉のメロディを楽しめる。演奏は哲学の道・ロムナード・コンサートの仲間たち（関西フィルハーモニー管弦楽団メンバーによる弦楽五重奏）。演奏曲目は「タラのテーマ」「エデンの東他。十一月十九日（木）十五時半と十九時の二回、オークホール（オーク200・番街八階）で。入場料千五百円（小中学生八百円）。定員各回二百五十名。小学生以上が対象。申込方法など詳細は同センター（☎六五七・一四二〇）へ。

●井大町市民学習センター「にっぽんのうたころのうた」 次世代へ歌い継ぎたい日本の歌を、本格的なオペラ歌手の歌声と共に、背景やエピソードを学びながら楽しむ「レクチュアコンサート」シリーズの五回目。今回は冬・新春・早春・冬来たりなは春遠からじ」をテーマに冬から春にかけての歌を。出演はソプラノ・小梶史絵さん、バリトン・橘茂さん、ピアノ・金岡優子さん。企画・構成・司会は大田道宏さん（関西フィルチェロ奏者）。曲目は「冬景色」「ちんちん千鳥」「浜千鳥」「冬の夜」「春の海他。一月十四日（火）十九時から同センター講堂で。料金は一

般千五百円（前売千二百円）、小・中学生八百円。定員百二十名（先着順）▽申込方法など詳細は同センター（☎六五七・一四二〇）へ。

●シネ・ヌーヴォー「生誕百年記念 森繁久彌映画祭」 日本が誇る偉大なエンターテナーにして、戦後日本を笑いと涙で鼓舞した森繁久彌の生誕百年を記念し、代表作二十五本を一挙上映。

希代の名優と名監督が織り成した感動の昭和映画史を辿る。十一月十八日から上映。年末までの中断を経て二月二日・十七日の上映作品は『社長道中記』『社長洋行記』『喜劇 駅前茶釜』『喜劇 駅前音頭』『喜劇 駅前大学』『喜劇 駅



→ストリップ 幹旋所を舞台にした人情譚『喜劇 女は男のふるさと』『上と吉本興業の女主人をモデルにした山崎豊子原作『花のれん』⑥

前百年』『喜劇 駅前棧橋』『喜劇 女は男のふ

るぞ』『暖簾(のれん) 追悼・山崎豊子』『花のれん

(同)上映時間など詳細は同館(地下鉄九条駅)

⑥出口歩三分 八五八・一四二六へ。

●ガットネロ 市岡在住の社会派シンソング

手・松浦由美子さんの主宰の音楽喫茶。毎月様々

な企画。①HAMORRI・BEE(はもりべ)のう

た★カフェ第十八回「若手テノールデュオ(中

川公志(こうじ)さん・小原有貴(おなりの)さんが日本の懐かしい

歌を歌つ。ピアノ：古谷優子(ふるやゆうこ)さん。土月十九日

(土)十五時(金)五、二十日(金)十五時(金)五、

同十九時。会費 千五百円(二飲物付、定員十五

人、要予約)②チェロとピアノによる迎春「ンサ

ート」北山悠祐(きたやまゆうすけ)さんの



→ガットネロを主宰する松浦由美子さん①と

「うた☆カフェ」出演のHAMORRI・BEE②

ピアノで。一月二日(金) 十五時。入場料千円③

ミュージックカフェ「渡邊加奈(わたなべかな)さんのフル

ートと脇山幹士(たけやまかんじ)さんのピアノで「イパネマの

娘」「リベルタン」など。一月 十八日(日)十四

時。入場料三千円(前売 千五百円)▽ガット

ネロは天王寺区上本町六・二・三七、地下鉄谷

町九丁自駅①出口、八六七六七・〇〇二。

●ギャラリー「はたなが「上月ひとみテンペラ画

展」「わたしの小さな祭壇」と題し、土月

十日(木)〜十五日(日)。十八日(水)

は休館。開場は十一〜十九時(最終日は十七時

まで)。磯路二・二・五(港区役所向かい)、

八六五七・一五九八七。



→上月ひとみテンペラ画展「わたしの小

さな祭壇」への出展作品から「道祖神」

ひとくちPR

(1行＝税込1000円)

●アルバイト急募 週一回の新聞配達と月一回

の集金を都合のいい時間に。港民主商工会(夕

四・一・〇・一六、八六五七・一七八六七)。

●放課後・春夏夏休みは学童保育へ 入所見募

集。見学無料・体験OK。家族的雰囲気。区内に

二カ所。八五七五・〇三三五ありん。

●介護ベッド無料で譲ります 要分解・引き取

り。希望者は八五七二・四八三六港新聞へ。

読者プレゼント

※いずれもハガキに当月の感想とプレゼント

名を書いて20日必着で港新聞へ。

●交通科学博物館 (三三文化案内) 招待券をへ

A2組に。

●関西フィル「華麗なるニューイヤークンサー

ト」(三三文化案内)招待券をへA1組に。

●弁天町市民学習センター「つぼんのうたこ

ころのうた」(三三文化案内)招待券をへA1組に。

●石炭倉庫「リビート山中学生忘れコンサート

(三三文化案内) 第一部招待券をへA1組に。